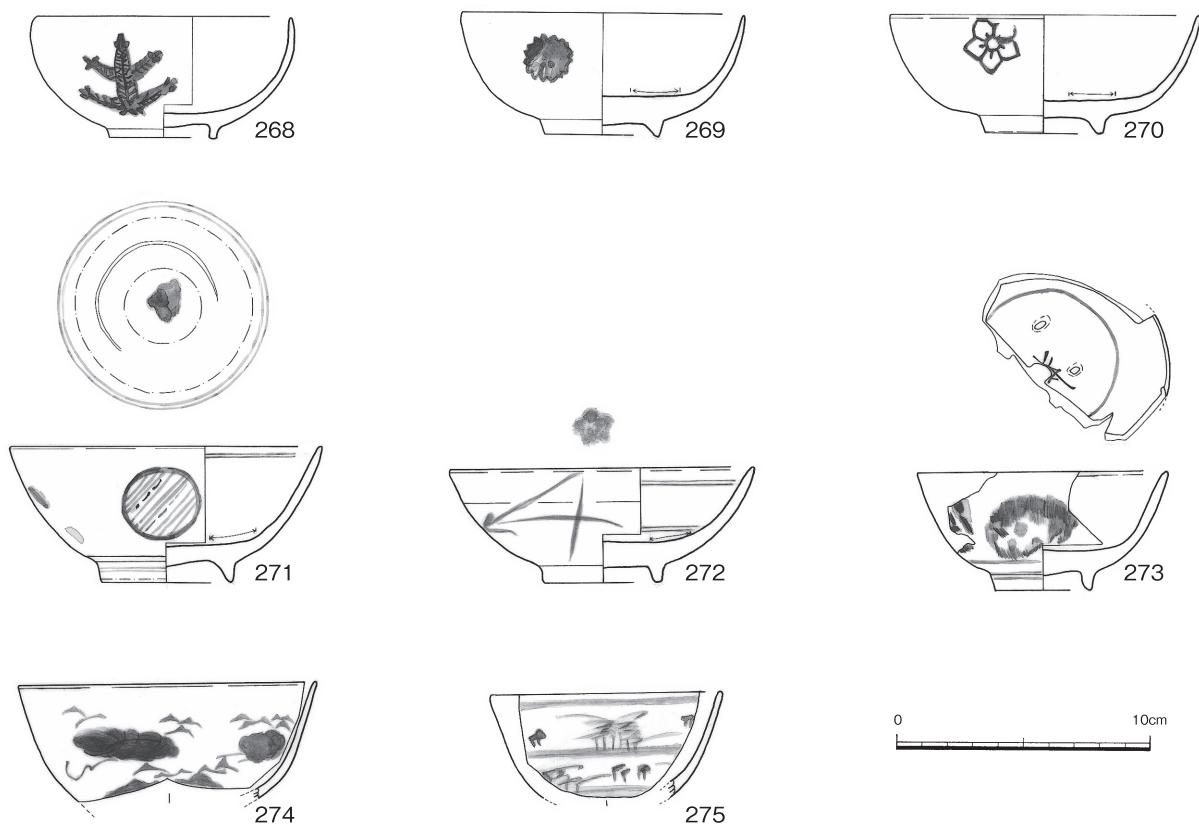


第 103 図 中世～近世の出土遺物 3 国内産磁器



第 104 図 中世～近世の出土遺物 4 国内産磁器

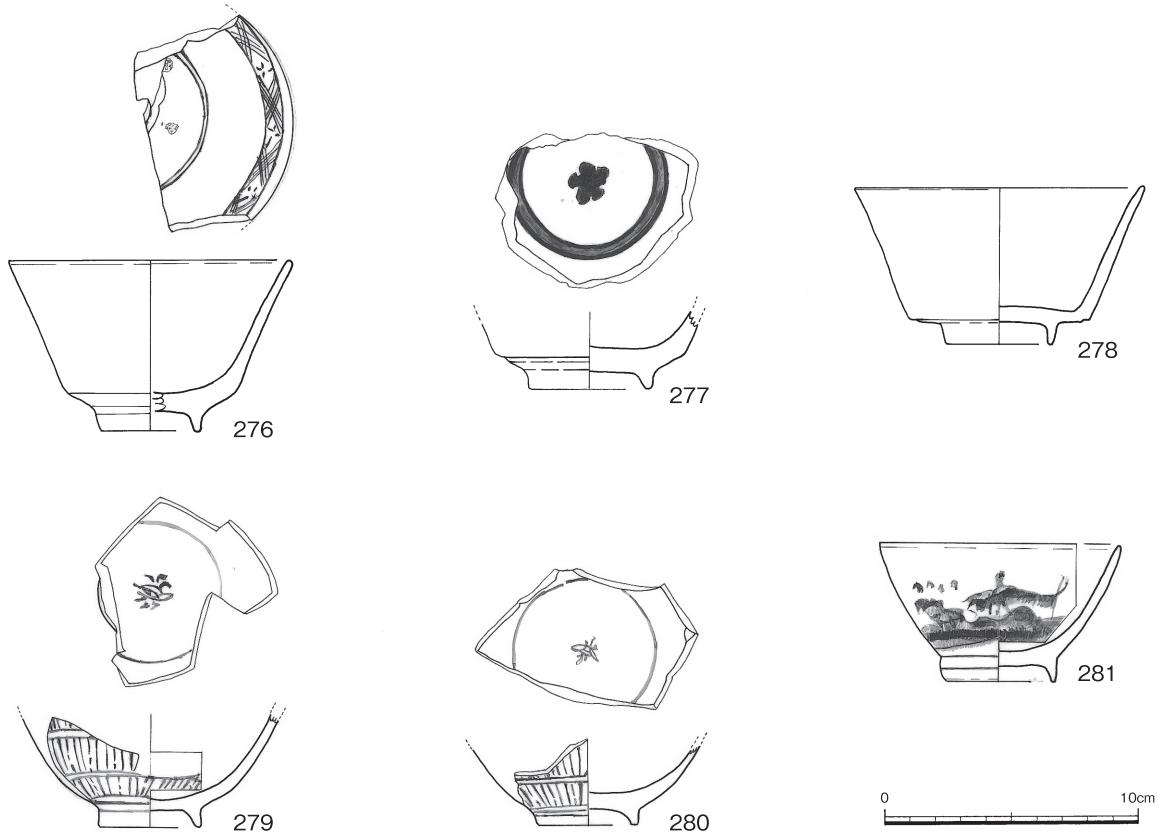
廣 東 形 高台が高く、体部は逆ハの字状に開く形状を呈する。

端 反 形 口縁部が外反するもの。

半 筒 形 体部が筒状の形状を呈し、腰部で強く屈曲するもの。

筒 丸 形 体部が筒状を呈し、腰部が丸みを帯びるもの。

250～275 は、丸形のものである。250 は白磁である。器壁が薄く、高台も細く先が尖る形状を呈する。251 は外面に青磁釉がかけられる青磁かけわけの碗である。見込みには呉須による花文が描かれる。252 は器壁が薄いもので、高台は低く先端は尖る。欠損しているため全体は不明であるが、高台内底面には裏銘がみられる。253 は内外面に二重網目文が描かれる。見込みには花文が描かれる。254 は高台が低く、やや外側に開くバチ状を呈する。器壁は薄く、上手のつくりであるが、見込みに窯傷が残る。255・256 はやや腰が張るタイプのものである。257 は外面に青磁釉がかかるもので、口縁部内面には四方櫛文が描かれる。258 は器壁が薄く、やや大振りの碗である。外面には一重網目文と魚文と思われる文様が描かれる。畳付には砂粒が付着する。259・260 は焼成不良のためか、透明釉が溶けきっておらず、釉の発色も悪い。259 は外面に矢羽根文が描かれる。260 は外面に一重網目文が描かれる。261～272 は器壁が厚く、胎土の色調が灰色ないしは灰白色を呈するものである。261 は詳細な判読はできないが、「□□年製」の裏銘がみられる。262・263 は畠



第105図 中世～近世の出土遺物5 国内産磁器

付に砂が付着し、263・264は見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施される。265～267はやや小振りの碗で、266は透明釉に貫入がみられる。267は見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施される。267は在地産と思われる資料である。268～270は、外面にコンニャク印判による文様が施された資料である。268は若松文、269は菊花文、270は花文である。271・272は、見込みに矮小化したコンニャク印判五弁花が観察される。272は外面に丸文が描かれ、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。272は外面に折れ松葉文が描かれる。273～278は透明釉が青みを帶び、呉須の発色も悪く文様が滲んでいるもので、在地産のものと思われる。273は見込みに、窯道具の目跡が残る。274・275は外面に山水文が描かれる。

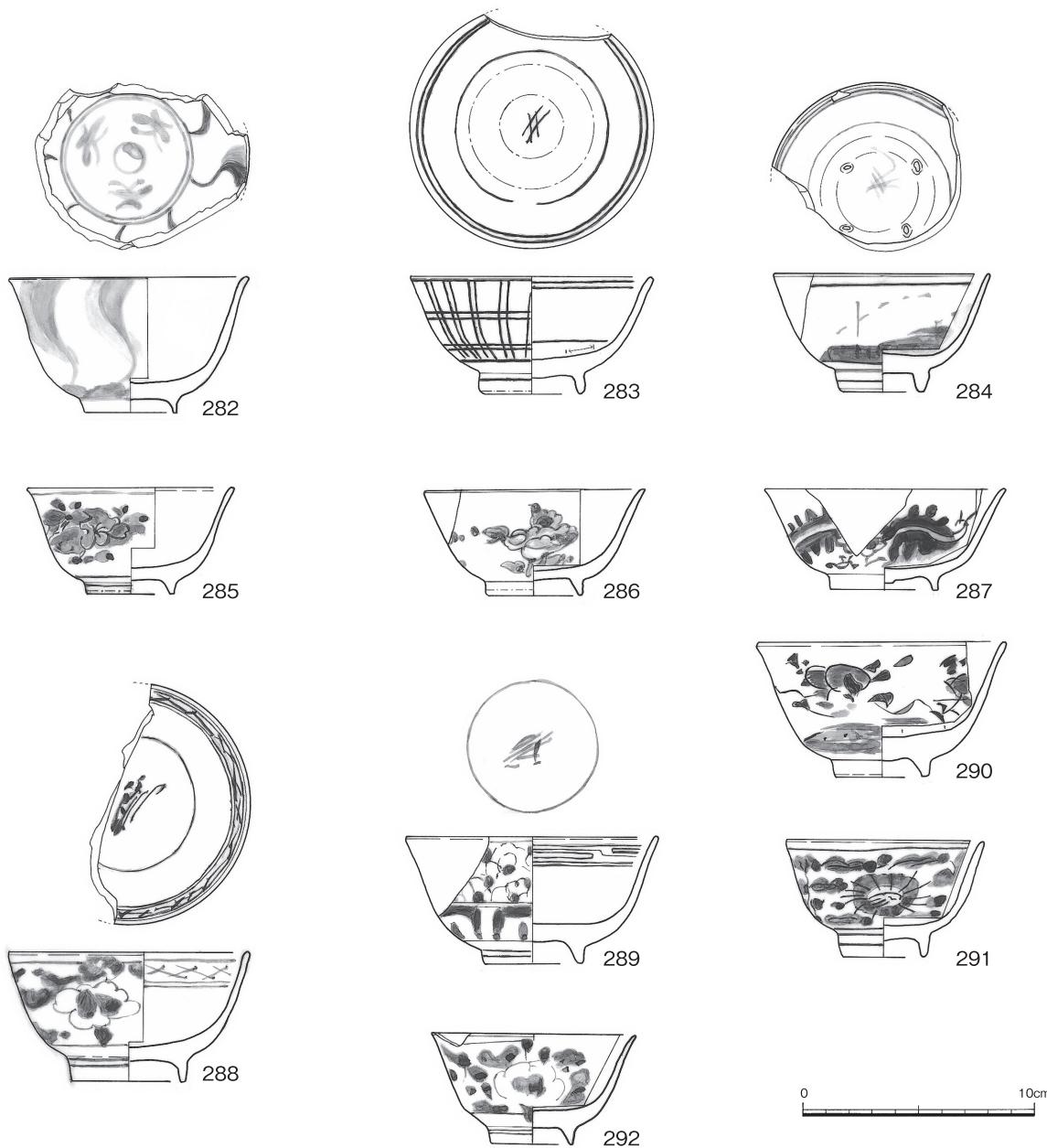
276～278は、朝顔形の碗である。276・277は外面に青磁釉がかけられたものである。276の口縁部内面には四方櫛文が描かれる。欠損しているが見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされる。277は見込みに幅広の圈線とコンニャク印判五弁花がみられる。278は白磁である。在地産の可能性が考えられる。

279・280は小廣東形の碗である。やや小振りの資料で、外面には梵字文、見込みには虫文が描かれる。透明釉がやや青みがかり、文様の描き方も雑であることから、在地産のものと思われる。

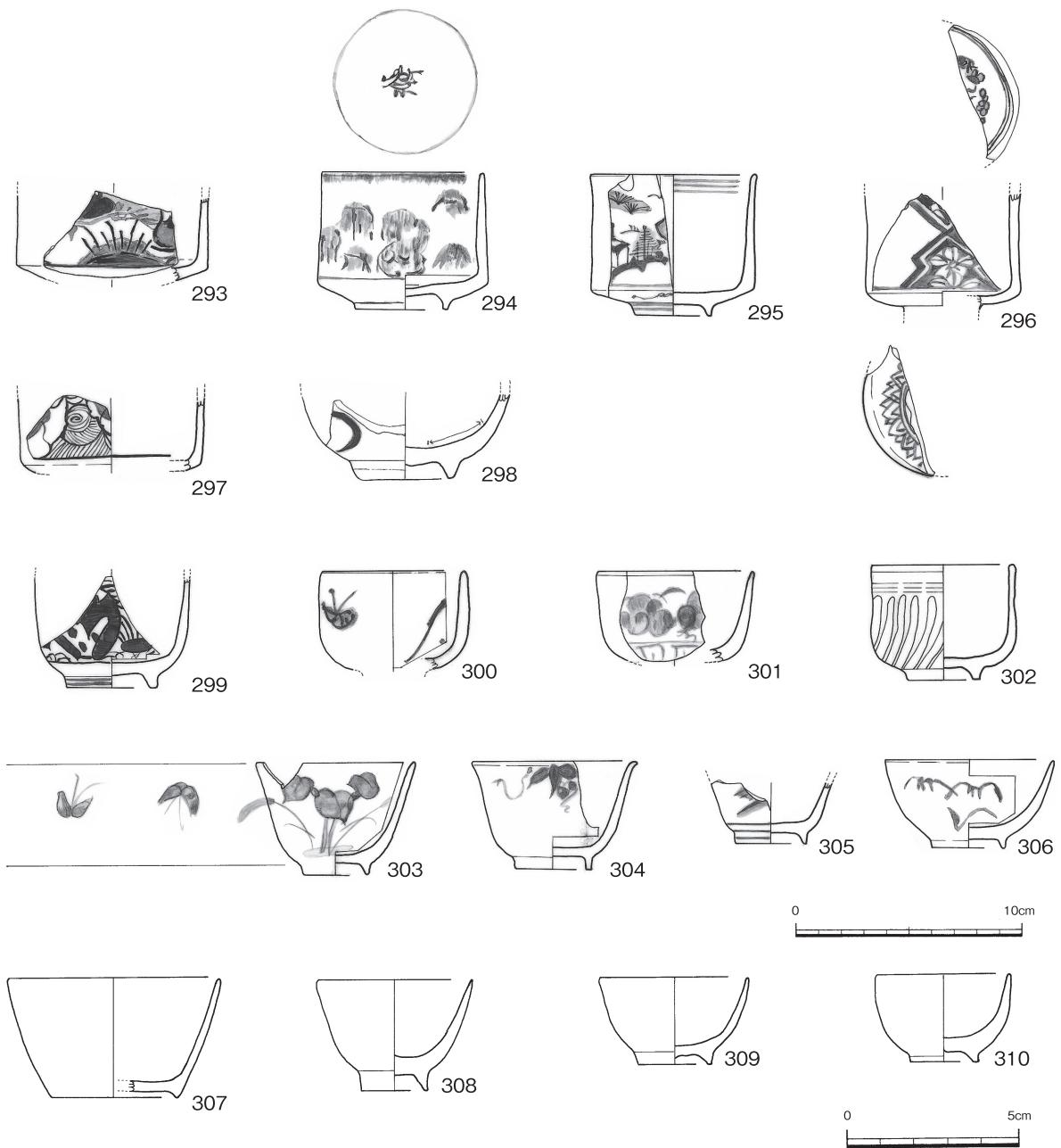
281は廣東形の碗である。一般的な廣東碗と比べ、高台は低くやや小振りである。外面に描かれた山水文は呉須が滲んでおり、透明釉も青みがかったりしている。在地産のものと思われる。

282～292は端反形の碗である。282は肥前産のものである。清朝磁器の影響を受け、内外面にねじ花文が描かれ、見込みには3匹の蝶が描かれる。透明釉には貫入がみられる。283～292は在地産と思われる資料である。283は外面に二重格子文が描かれる。見込み中央にも格子文が描かれ、蛇ノ目釉剥ぎが施される。284は外面に山水文が描かれ、透明釉には貫入が入る。見込みには目跡が残る。285～287は外面に草花の文様が描かれる。288は外面に山水文、289～292は唐草文が描かれる。291・292はやや小振りのものである。

293～297は半筒形の碗である。293・295～297は比較的呉須の発色が良い資料であるが、294は呉須が滲み、透明釉が青みを帯びる。在地産の資料と思われる。外面には雪持ち笹文、見込みには虫文が描かれる。



第106図 中世～近世の出土遺物6 国内産磁器



第 107 図 中世～近世の出土遺物 7 国内産磁器

298～302 は筒丸形の碗である。298 は白色の化粧土をかけ、その上から呉須で絵付けをしたもので、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。腰の張るタイプの碗にも分類できる資料である。301 は呉須の発色が悪く、滲んでいる。302 は在地産の白磁である。

小坏 (第 107 図)

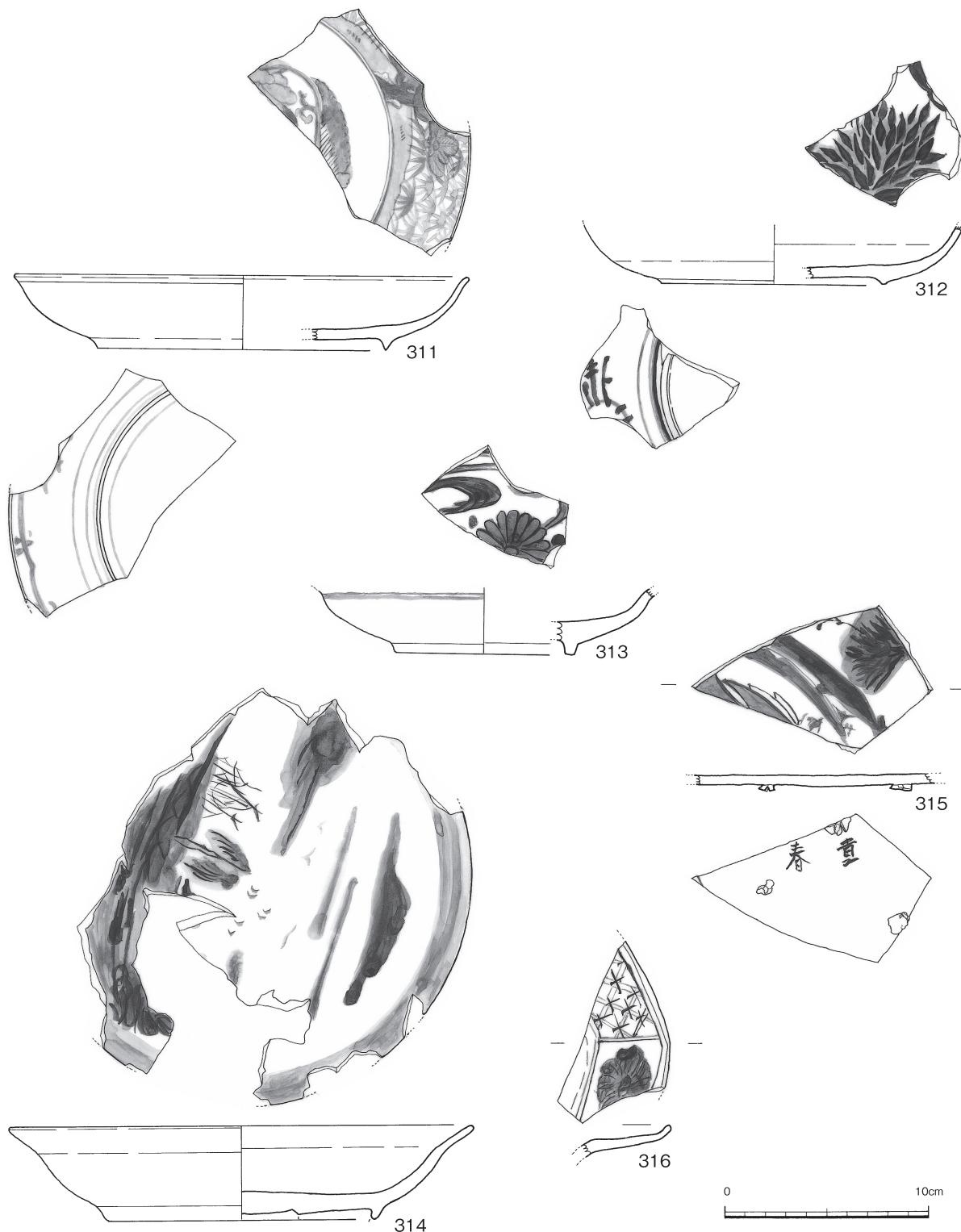
303～310 は小坏である。303～306 は、外面に染付が描かれるものである。

307～310 は白磁である。307 は高台と体部の境にくびれがなく、一直線に立ち上がる形状を呈する。

皿(第110・111図)

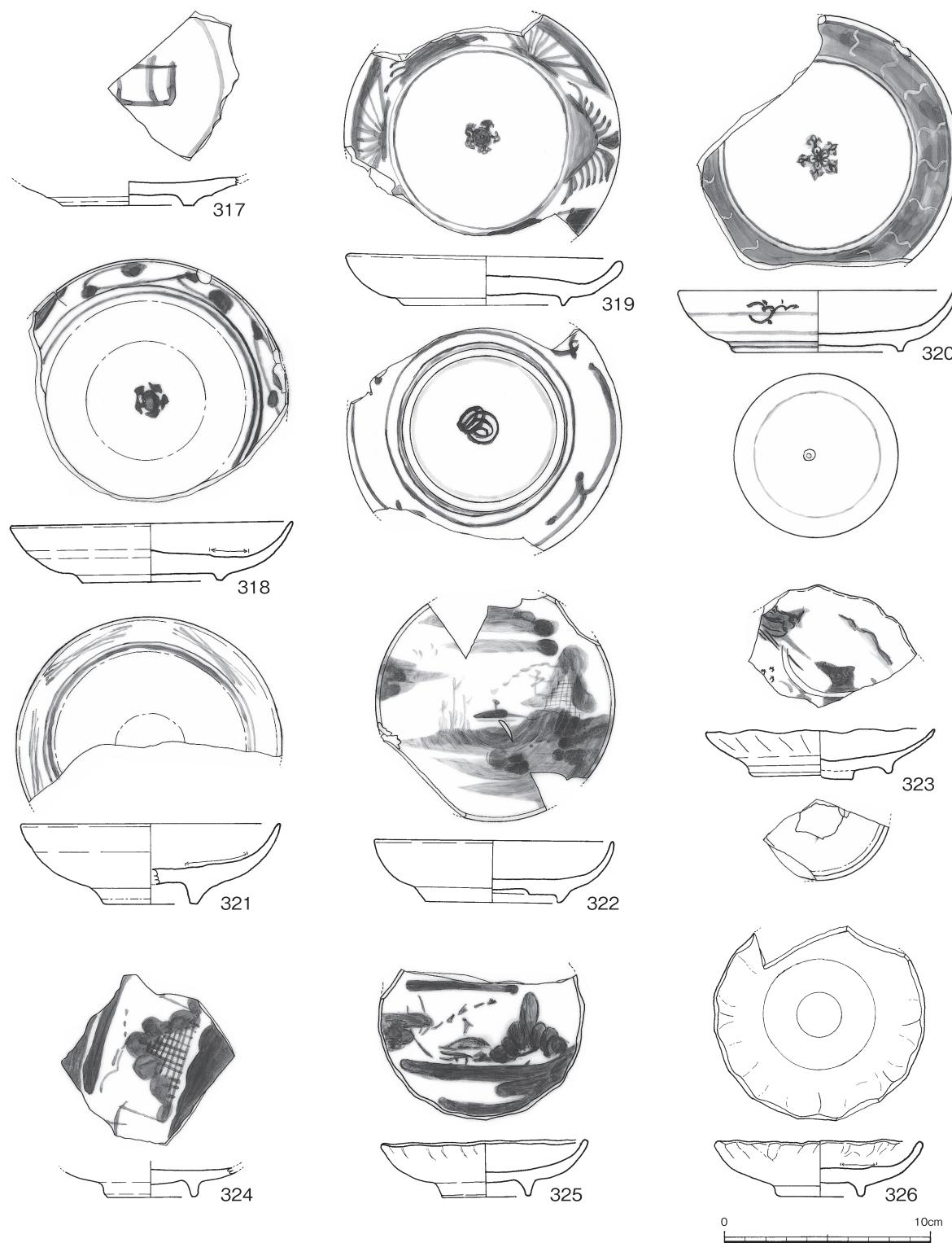
皿については、大皿(口径22cm以上)・中皿(口径12cm~15cm)・小皿(口径10cm~12cm未満)の3つに細分化した。

311~316は大皿である。311は口縁端部がわずかに外反するものである。312は裏文様の唐草

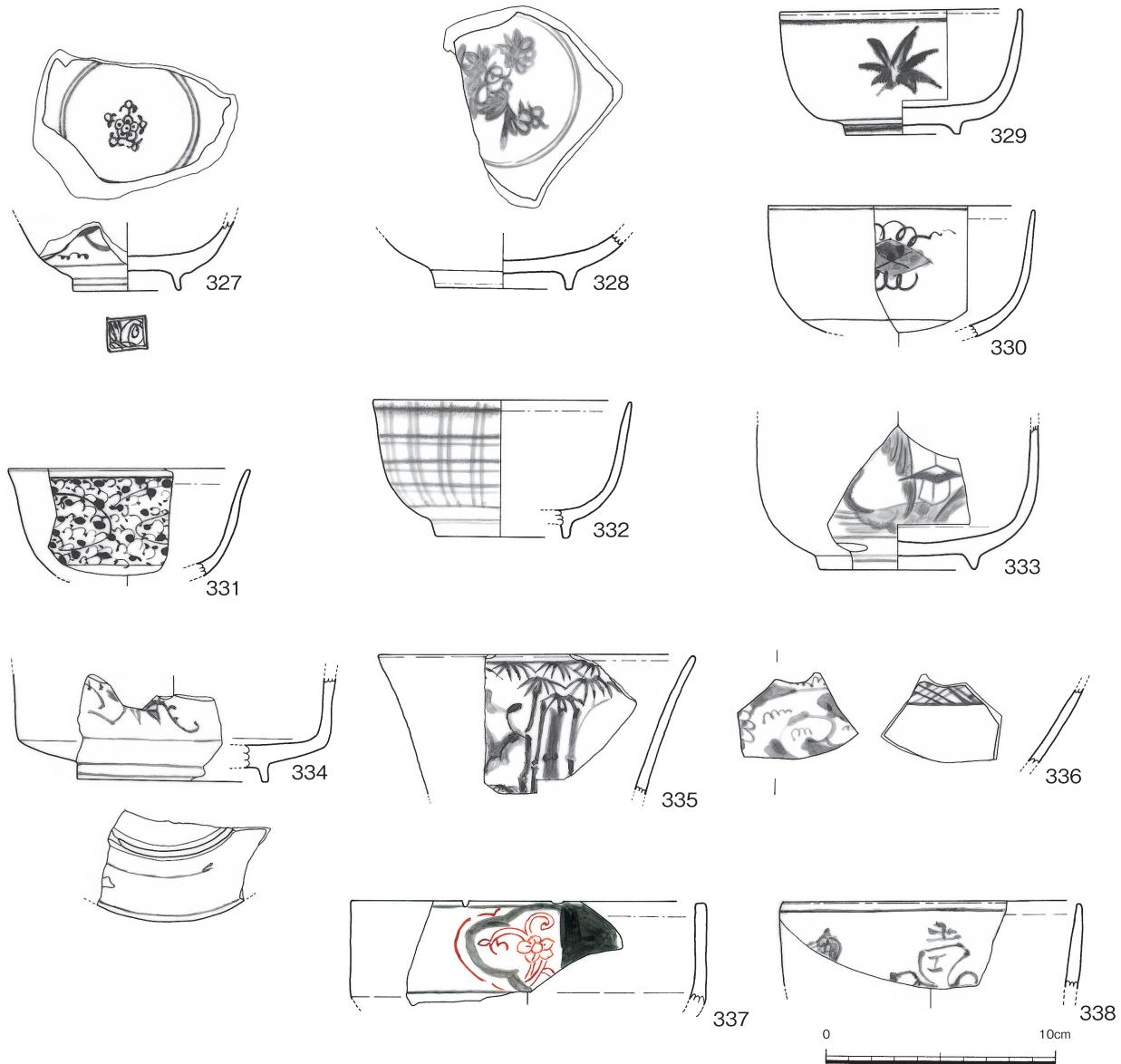


第108図 中世～近世の出土遺物8 国内産磁器

文が崩れず描かれている。313・314は折れ縁の皿である。314は蛇ノ目凹型高台を呈する。白化粧土をかけた後、呉須により山水文を描く。315は底面のみの資料である。高台内底面にはハリ支えの粘土が熔着する。また、裏銘が描かれており、「貴・春」の二文字がみられる。316は一部であるため詳細は不明であるが、六角ないしは八角の皿になるものと思われる。



第109図 中世～近世の出土遺物9 国内産磁器



第 110 図 中世～近世の出土遺物 10 国内産磁器

317～322は中皿である。317は見込みに「日」の字が描かれるもので、日の字鳳凰文皿と思われる。高台には砂が付着する。318・319は見込みにコンニヤク印判五弁花がスタンプされるものである。318は見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施される。319は裏銘に「渦福」が描かれる。胎土は灰色を呈する。320は見込みに手書き五弁花が描かれる。内側面は墨彈きの技法により白線を描き、その間をダミで塗りつぶす。321は高台径が小さく、見込みには幅の広い蛇ノ目釉剥ぎが施される。在地産のものと思われる。322は、高台が蛇ノ目凹型高台を呈するものである。見込みに鉋の削り痕が輪状に残る。在地産と思われる。

323～326は小皿である。すべて在地産のものと思われる。323～325は内面に山水文が描かれるもので、323・325は口縁部が輪花をなす。326は白磁である。口縁部が輪花をなし、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施される。

鉢（第 110 図）

327～338 は鉢である。327～329 については鉢としたが、碗の可能性も考えられる。327 は見込みに手書き五弁花、裏銘は二重枠の「角福」が描かれる。328 は外面が青磁釉のもので、裏銘に「大明年製」の文字が描かれる。329 は腰が張り、丸みを帯びる形状のもので、高台も低く短い。330～332 は蓋付きの鉢で、口縁部内面は釉剥ぎされる。334 は腰部が強く屈曲する筒形を呈する。335・336 は体部が外側に外反するもので、外面には筈文が描かれる。

337・338 は段重である。口縁内面は釉剥ぎされ、蓋が被るものと思われる。337 は色絵である。上絵が剥落している。338 は外面に宝船の文様が描かれる。対になると考えられる同じ文様の蓋（第 112 図 352）も出土している。

蓋（第 111・112 図）

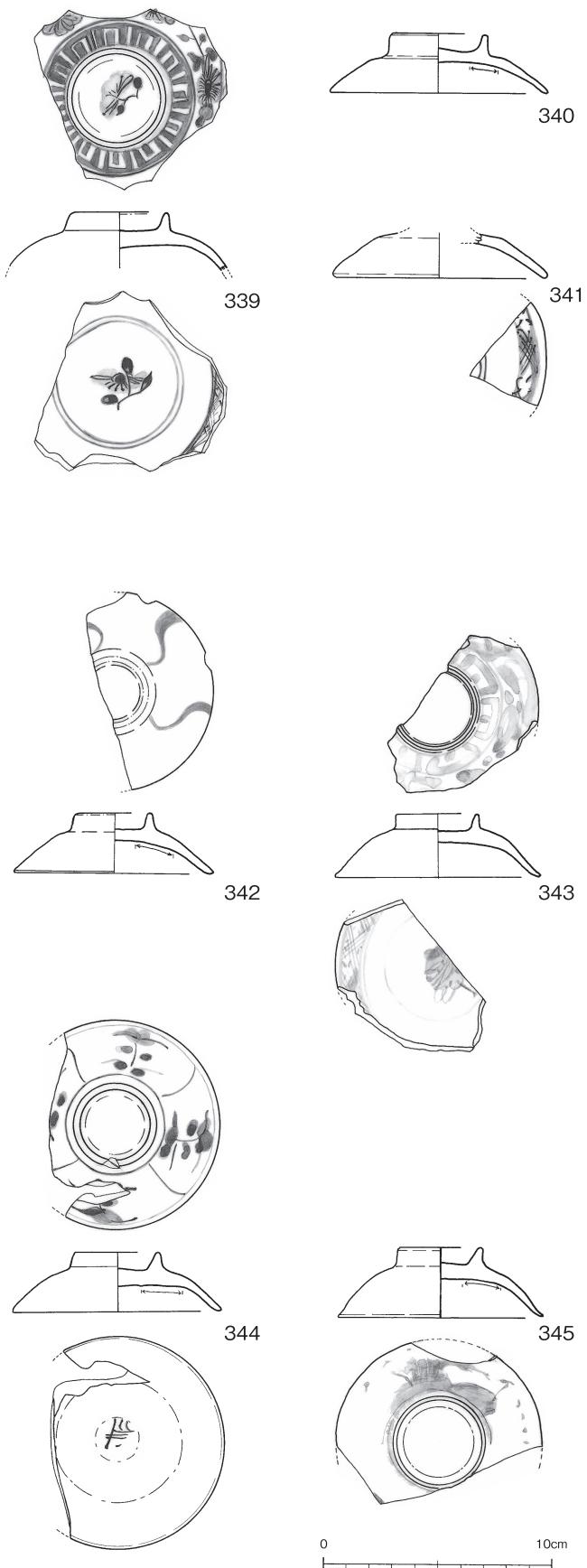
様々な器種に被せられるものを、蓋として分類した。本遺跡では、碗蓋、段重蓋、土瓶蓋、壺蓋が出土している。

339～345 は碗蓋である。碗蓋は身と対になっているため、文様や形状はほぼ一致する。

339 は丸碗の蓋である。340・341 は朝顔形の蓋である。340 は白磁、341 は外面青磁釉の碗蓋である。342～345 は端反碗の蓋である。

346～352 は段重蓋もしくは蓋物の蓋である。これらは類似するため分類が困難である。つまみの形状により大きく 2 つに分類した。

346～350 はアーチ状のつまみを有する蓋である。身受け部は釉剥ぎされる。351 は球状のつまみを有する。身受け部の釉は釉剥ぎされる。353 は白磁の土瓶もしくは急須の蓋である。354 は磁製の壺蓋である。



第 111 図 中世～近世の出土遺物 11 国内産磁器

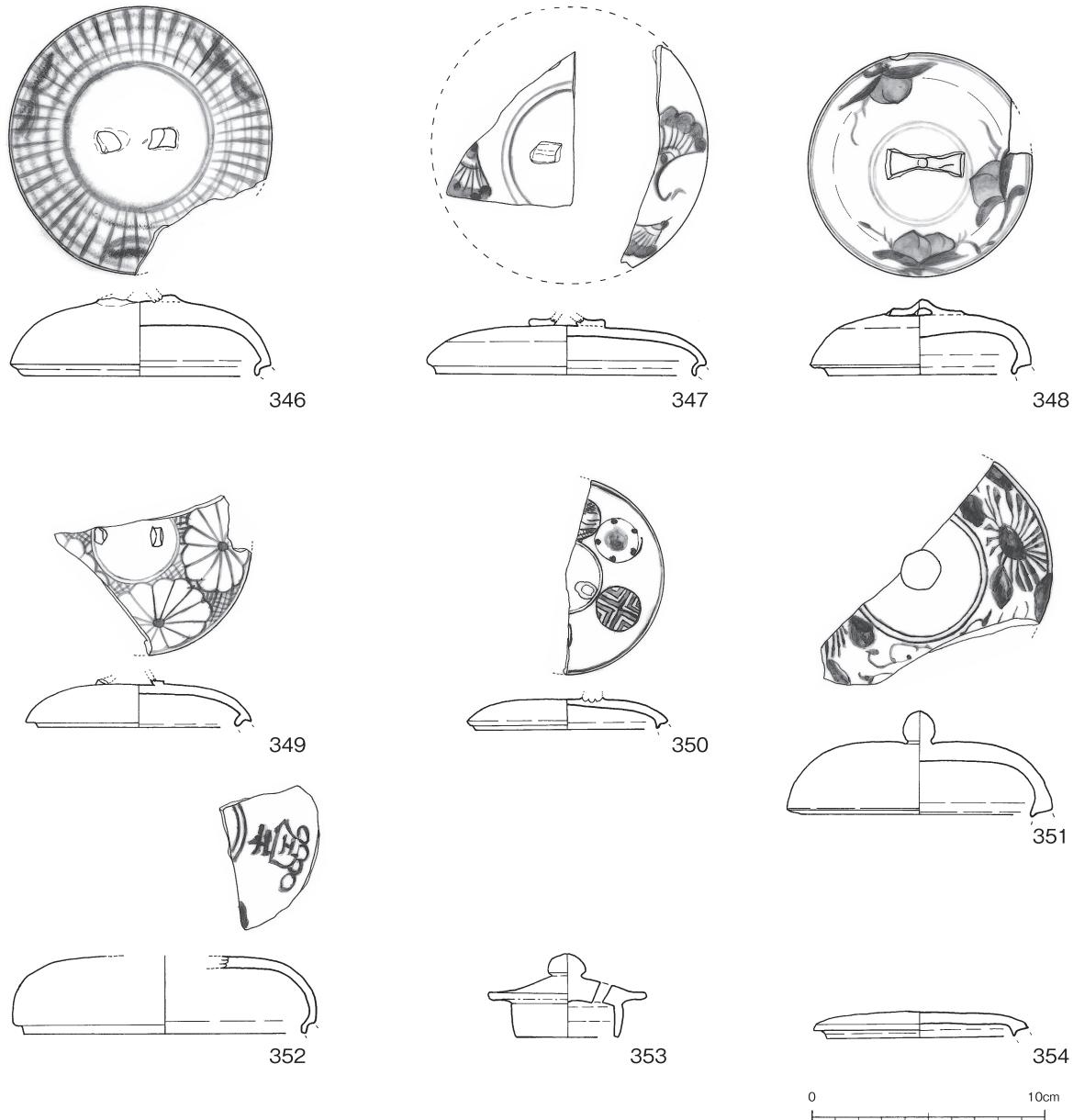
瓶（第 113 図）

袋状の形状を呈し、口縁部より液体を注ぐものを瓶として分類した。355～358 が瓶に相当する。本遺跡では徳利、油壺が出土した。

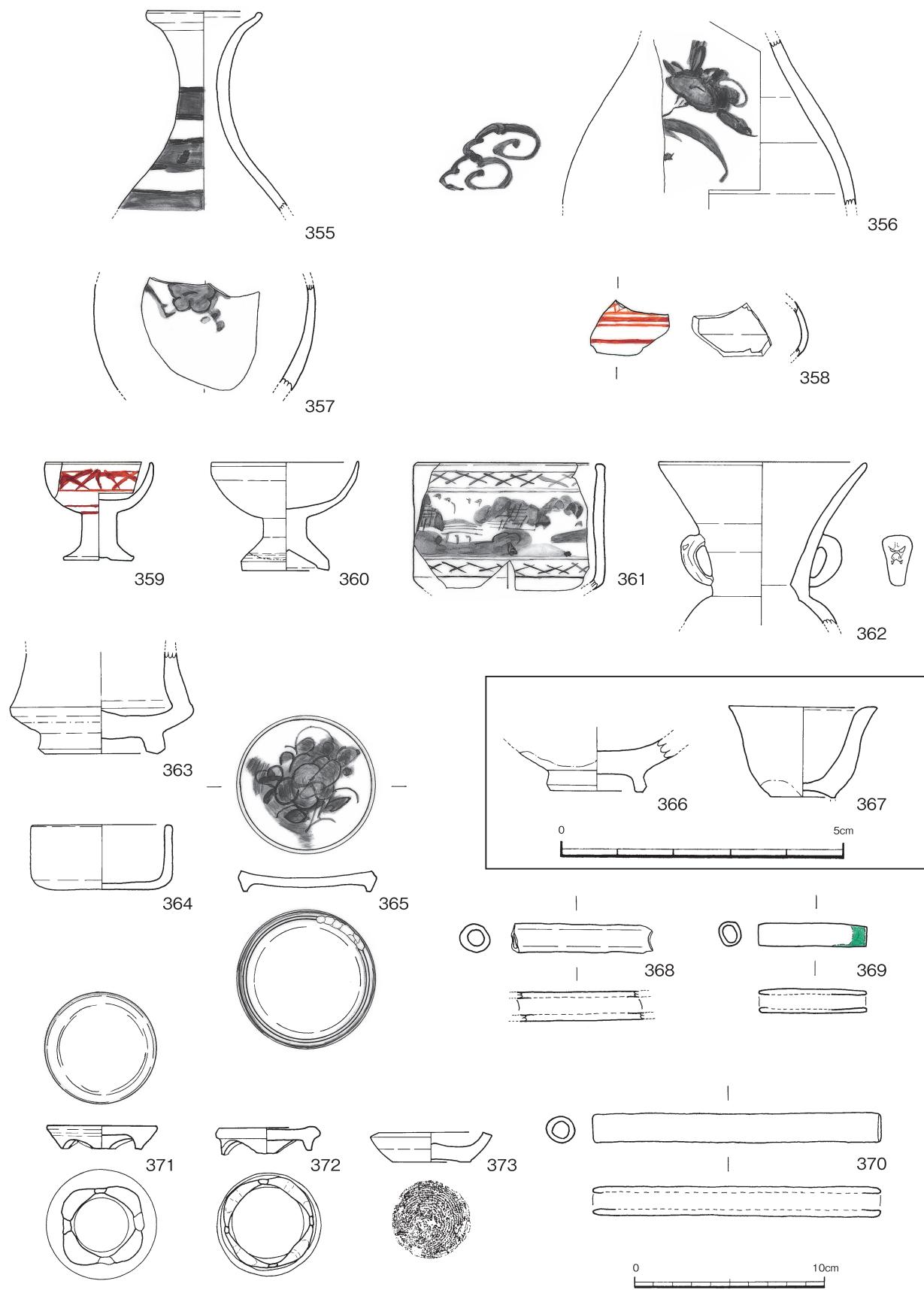
355～357 は徳利である。355 は頸部が細くくびれ、口縁部はラッパ状に開く形状を呈する。外面にはダミによる横線が 3 条観察される。356・357 は胴部である。全体の形状は不明であるが、内面が無釉であることから瓶とした。358 は赤絵の油壺である。

仏具（第 113 図）

359～363 は仏具である。359・360 は仏飯器で、359 は赤絵、360 は白磁のものである。361 は



第 112 図 中世～近世の出土遺物 12 国内産磁器



第 113 図 中世～近世の出土遺物 13 国内産磁器

香炉である。内面は無釉で、外面には山水文が描かれる。362・363は白磁の仏花器である。同一個体ではないかと思われる。胎土が灰褐色を呈するため、白化粧土をかけた後透明釉がかけられる。

その他の磁器（第113図）

特殊な用途のものや出土点数が少ないので、分類を行わなかったものを「その他の磁器」として掲載した。

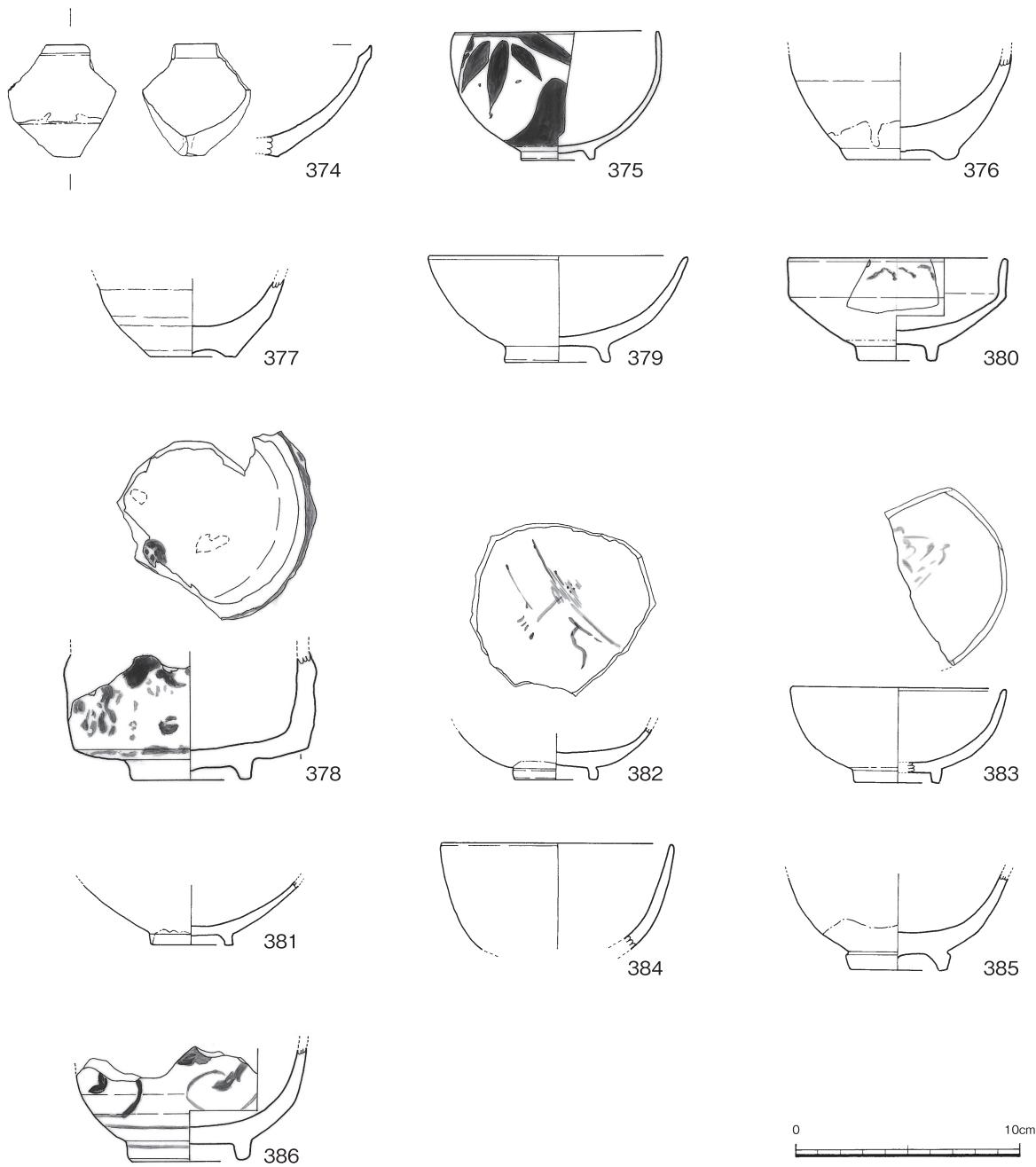
364は鳥の餌入と思われる。白磁の資料であるが、胎土の質が悪いため、白化粧土をかけた後透明釉がかけられる。365は皿であるが、底部が鋭い刃物状の工具で円形に切り取られた資料である。用途は不明である。366・367は玩具である。お飯事道具と思われる。陶製や土師質のものも出土している。（第135図538・539）366は碗、367は小壺の形状を呈する。368・369は馬の尻がいである。368は内外面とも無釉で、369は外面の一部に緑色の釉薬がみられる。370は368・369と同様に、内外面とも無釉の資料であるが、長さが15cmと長く、馬の尻がいではないと思われる。近代以降の電線等を束ねた磁製の容器とも考えられる。371～373は窯道具である。371・372は抉られた高台がつく切り高台付ハマで、373はチャツである。3点とも磁製のもので、磁器を焼く窯場で使用される窯道具である。本遺跡の近隣には、18世紀後半から開かれた磁器を焼成した平佐系窯場が存在することから、そこで使用されていた窯道具が、製品と一緒に混入して流通したものと考えられる。

国内産陶器

国内産陶器としては、関西産（京焼）、瀬戸・美濃産、肥前産、在地産（薩摩焼堅野系・龍門司系・苗代川系）の陶器が出土している。分類にあたっては、器種ごとの分類のほか、判別できるものについては産地を重視した。

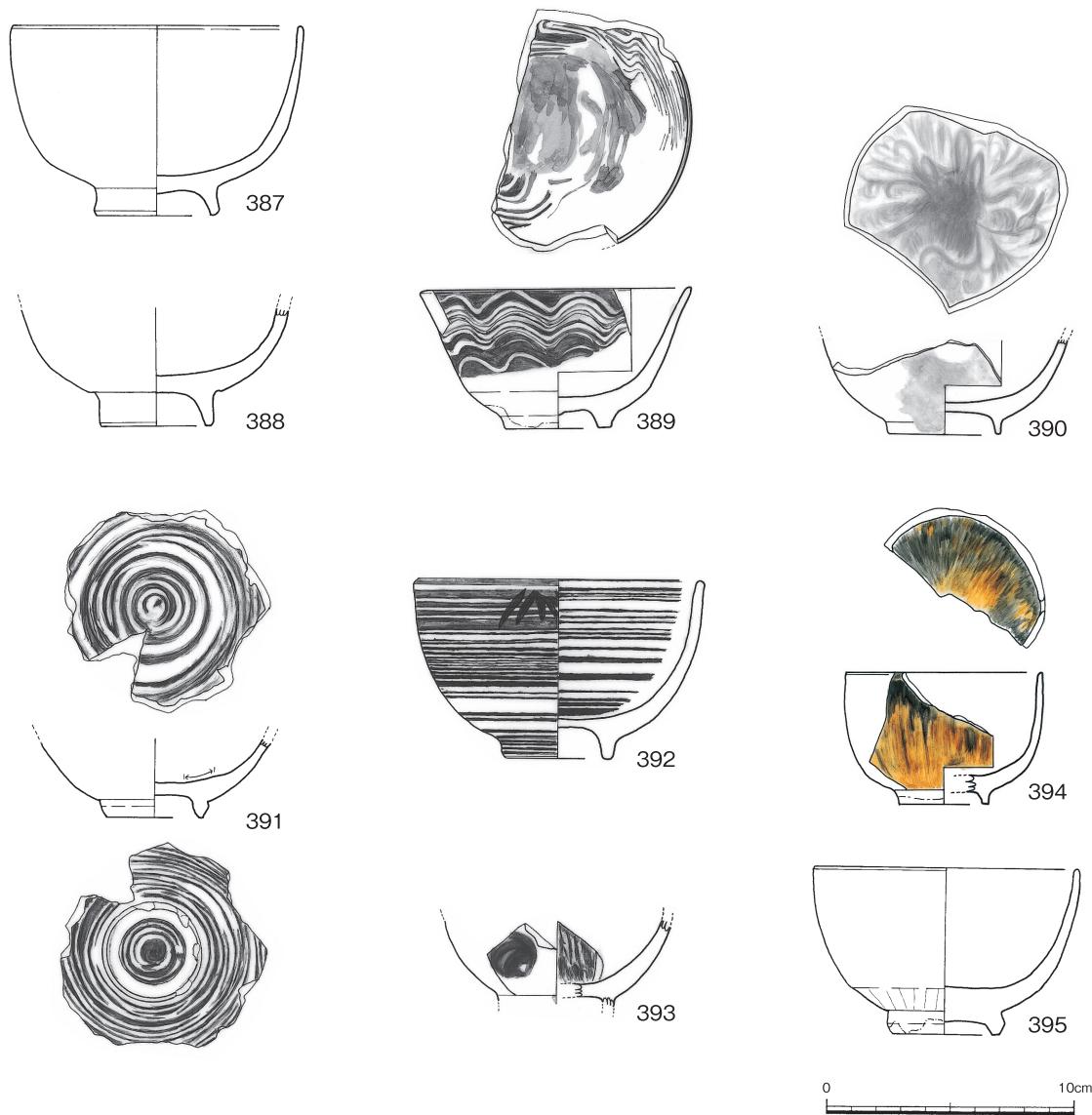
碗（第114～116図）

374は瀬戸・美濃産と思われる天目碗である。胎土は浅黄色の色調を呈し、褐色の化粧土の上から黒釉がかけられる。375は京焼である。体部は丸みを帯び、口縁部は内湾する。外面には 笹文が色絵で描かれるが、上絵付けのため剥落している。釉は外面高台脇以下高台内底面まで露胎する。376～386は肥前陶器である。376は鉄絵唐津と思われる資料で、残存部の端部にわずかに鉄絵が観察される。胎土は橙色を呈し、灰色の灰釉がかかるが、外面腰部以下は露胎する。377も唐津焼である。鉄絵等は見られないが、胎土目段階の資料と思われる。378は腰部が強く屈曲した半筒形のもので、織部好みの沓形風のものである。外面は腰部まで黒釉が厚くかかり、その上から乳白色の藁灰釉がかかる。379～383は京焼風陶器である。379は高台内底面まで施釉されるが、ほかは外面腰部以下高台内底面まで露胎する。380は煎じ碗形を呈し、外面に 笹文が描かれる。381は底部のみであるが、体部の開き具合から、380と同様の煎じ碗形になるものと思われる。382・383は見込みに鉄絵が描かれる。384は内野山窯系と思われるもので、胎土は灰黄色を呈し、釉は外面に銅緑釉、内面に透明釉がかけられる。385は内面に透明釉、外面腰部まで銅緑釉がかかるもので、胎土は灰褐色を呈する。高台と体部の境にはくびれを有する。385は陶胎染付である。灰色を呈す



第 114 図 中世～近世の出土遺物 14 国内産陶器

る胎土の上に、呉須で文様が描かれる。387・388は呉器手の碗で、腰部が張り丸みを帯びる。胎土は灰白色の色調を呈し、透明釉が畳付を除き総釉でかけられる。釉には貫入が観察される。389～392は内外面に、白土による刷毛目が施されるものである。389は釉の上から内外面に波状の刷毛目が施される。390は内外面に打刷毛目が施される。391・392は内外面に巻刷毛目が施されるもので、392は外面口縁部に鉄絵の筐文が描かれる。393は外面螢手、内面打刷毛目の資料である。394は筒丸形の碗である。褐釉の上から黒釉がかけられるもので、畠付には胎土目と思われる粘土



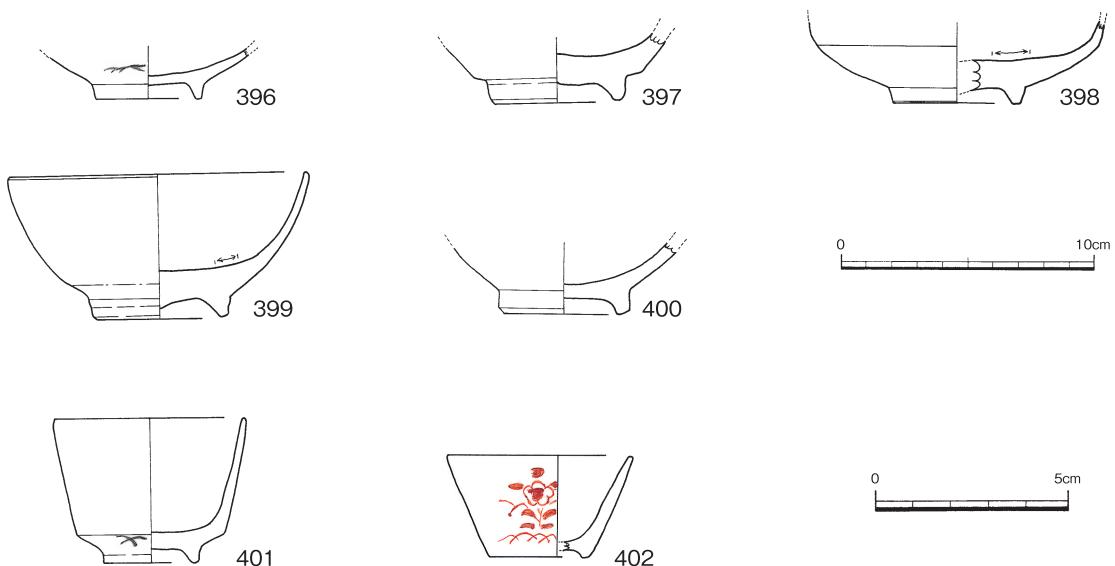
第 115 図 中世～近世の出土遺物 15 国内産陶器

が熔着する。

395 は白化粧土の上から透明釉がかけられた碗で、高台脇から高台内面は無釉である。腰部に鉋削りの痕跡が残る。

396～399 は薩摩焼である。396・397 は一般的に白薩摩と称される白色陶胎の碗で、堅野系のものと思われるが、397 については苗代川系堂平窯産の可能性も考えられる。386 は外面腰部に呉須による千鳥が描かれる。397 は器壁も厚く、全体的に稚拙なつくりである。豊付に目跡と思われる痕跡が残る。398・399 は龍門司系の資料である。3 点とも外面には褐釉がかかる。

398 は腰部で内側へ屈曲する形状を呈する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎが施される。399 の見込みにも蛇ノ目釉剥ぎが観察される。400 は、肥前系陶器の碗で、高台の削りが丸みを帯びる。



第 116 図 中世～近世の出土遺物 16 国内産陶器

小坏（第 116 図）

401 は薩摩焼堅野系の小坏である。白色陶胎の白薩摩で、外面腰部に鉄釉による千鳥が描かれる。
402 は肥前産の赤絵の小坏である。胎土は白色陶胎で、外面に草花文が描かれる。

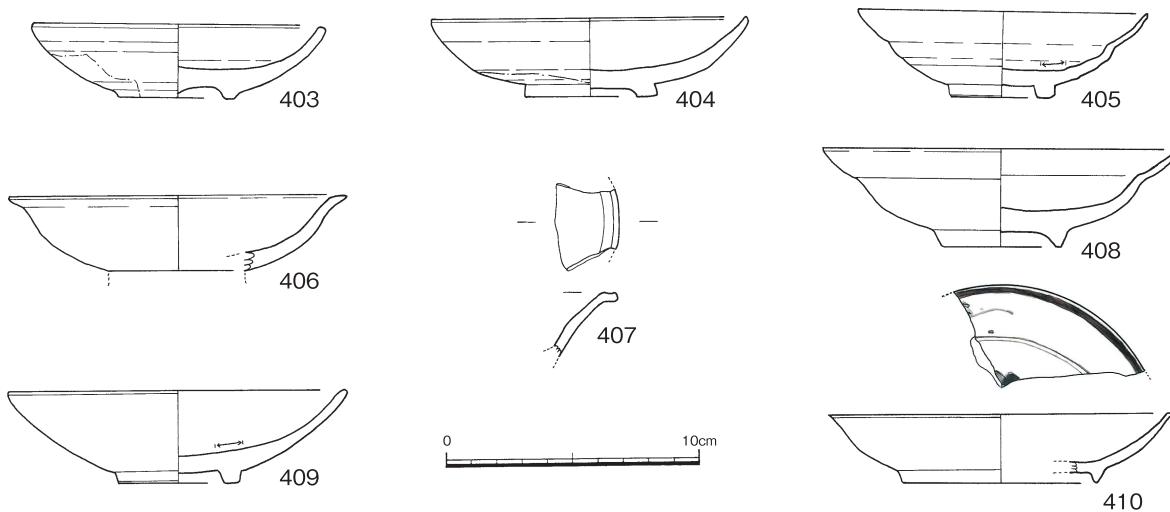
皿（第 117・118 図）

皿については、小皿（口径 12.5cm 以下）、中皿（口径 12.5cm 以上）、大皿（口径 19cm 以上）の 3 つに細分類した。大皿については鉢に分類できる可能性のあるものもあるため、小皿・中皿・大皿の順で掲載する。

403～405 は小皿である。肥前産である。403・404 は一般的に唐津焼と称されるもので、見込みに胎土目が観察される。405 は内野山窯系のもので、外面に透明釉がかかる。外面は腰部以下露胎し、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。

406～410 は中皿である。肥前産である。406 は口縁端部が外側に屈曲し、上部を平坦につくるものである。407 は溝縁皿の口縁部である。図化はしなかったが、おおよその復元口径より中皿に分類した。408 は見込みに砂目が観察される。胎土は黄色みを帯び、高台内面の削りは丸みを帯びる。409 は内野山窯系のものである。内外面に銅緑釉がかかるものと思われるが、釉の発色が悪い。見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施される。410 は口唇部に口鏽が施されたもので、内側面と見込みに呉須による文様が描かれる。

411～417 は大皿である。深さのある形状のものもみられるため、鉢として分類できる可能性も考えられる。411 は口唇部が溝縁をなすものである。見込みには円形の釉剥ぎが施され、鉄絵が描かれる。412 は褐釉に鉄絵が描かれるもので、見込みには胎土目が観察される。413 は口縁部内面に白土による刷毛目が施されたものである。見込みの蛇ノ目釉剥ぎは赤褐色に着色される。414 は内面に巻刷毛目が施されたもので、見込みに輪状の目跡が残る。415 は内野山窯系のかけ分けの皿



第 117 図 中世～近世の出土遺物 17 国内産陶器

である。銅緑釉と褐釉がかけ分けられる。416・417 は口縁部が折れ縁状を呈するものである。416 は屈曲部が短く、溝縁口縁とも捉えられる。白土による刷毛目が施される。417 は白土による刷毛目と化粧土の上に鉄釉で文様が描かれる。

鉢（第 118 図）

ここで取り扱う鉢は、食膳具としての鉢である。こね鉢等の調理具としての鉢は後述する。418～420 は肥前産の資料である。418 は口縁部が玉縁状を呈するもので、見込みには窯道具の脚部の目跡が 6 か所観察される。419 は巻刷毛目のものである。高台内底面に砂粒の混じる白色の粘土が熔着する。420 は鉢に分類したが、詳細な用途は不明の資料である。内野山窯系のものと思われるが、内外面とも銅緑釉と褐釉のかけ分けが施される。

蓋（第 119 図）

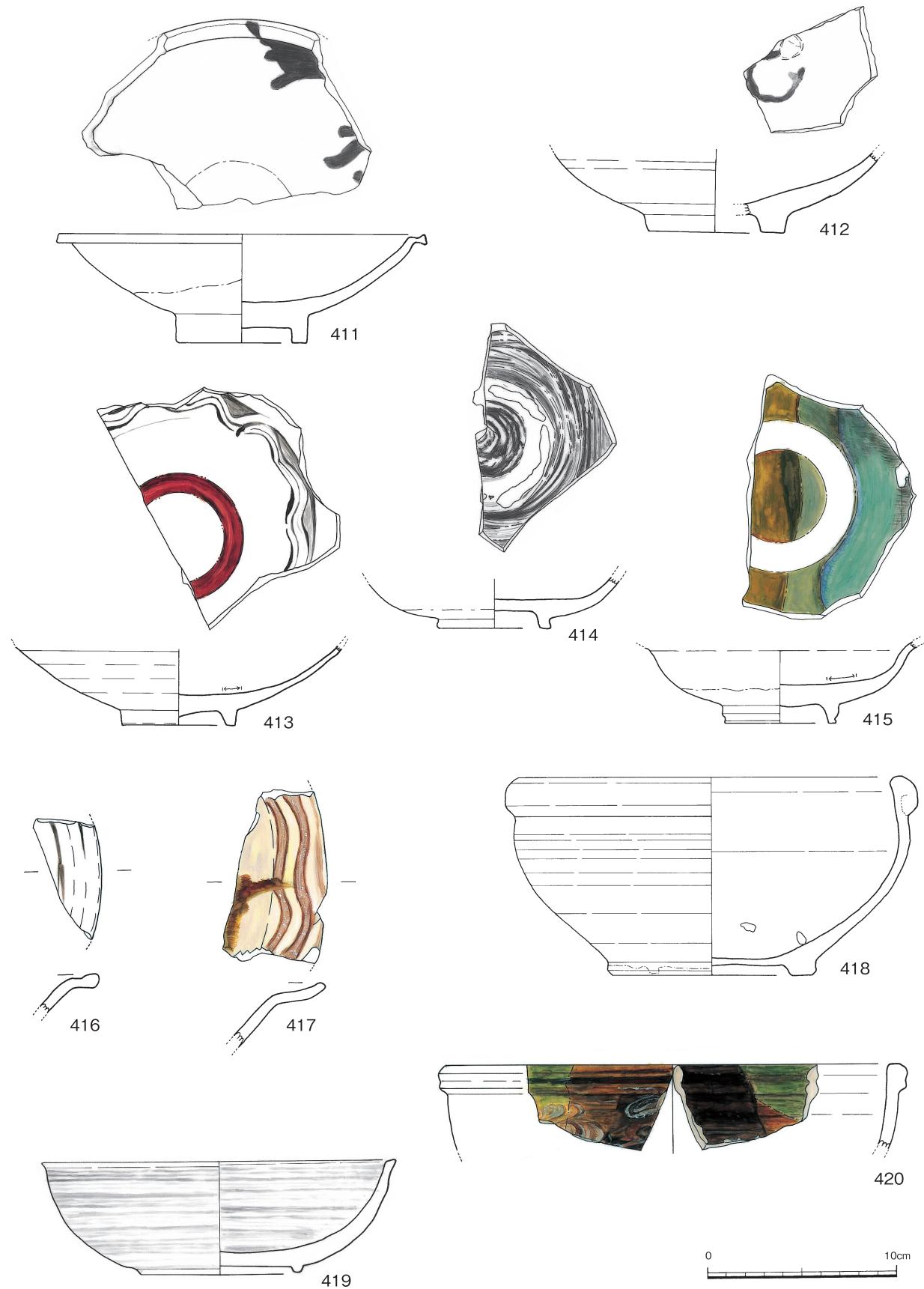
ここでは、甕等に被せられる浅鉢形以外の蓋を報告する。主に土瓶蓋を中心であるが、本遺跡からは陶製の瓶蓋も出土している。

421・422 は薩摩焼堅野系のものである。421 は白色陶胎の白薩摩で、土瓶もしくは急須の蓋と思われる。422 は灰色の色調を呈する胎土に、白土による象嵌が施される三島手で、急須蓋と思われる。423・424 は薩摩焼苗代川系の土瓶蓋である。上面には鉄釉がかかる。425 は薩摩焼龍門司系の壺蓋と思われる。胎土は赤褐色を呈し、上面に白土による短曲線が描かれる。

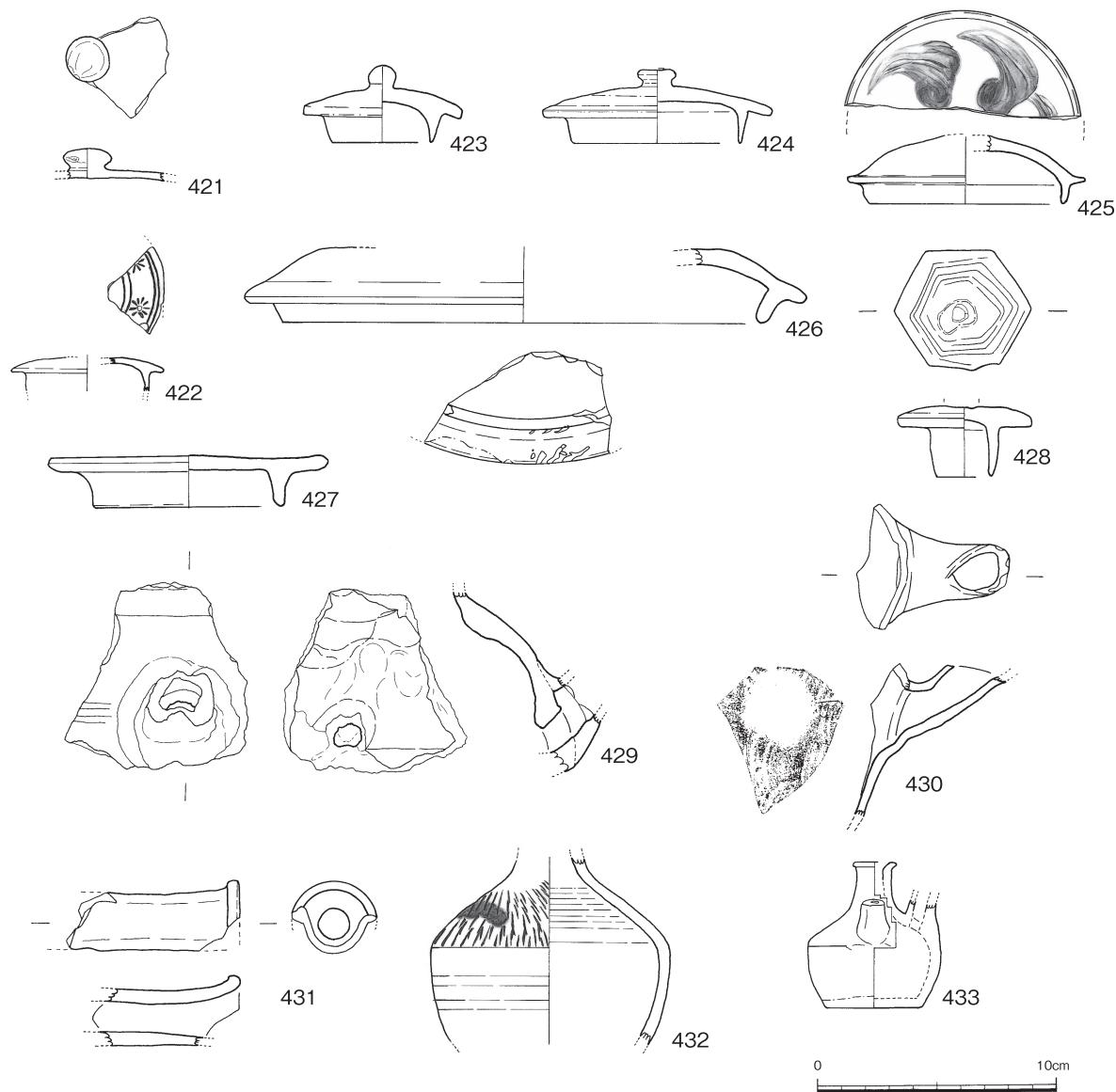
426 は鍋・釜等の蓋である。薩摩焼苗代川系のもので、釉剥ぎされた身受け部と口唇部に渡って貝目が観察される興味深い資料である。

427 は壺蓋である。薩摩焼苗代川系のもので、焼き締めである。初期の薩摩焼である堂平窯産の可能性が考えられる。

428 は瓶蓋である。薩摩焼苗代川産のものである。上面は六角形を呈し、中央に突起物がつくものと思われるが欠損している。



第 118 図 中世～近世の出土遺物 18 国内産陶器



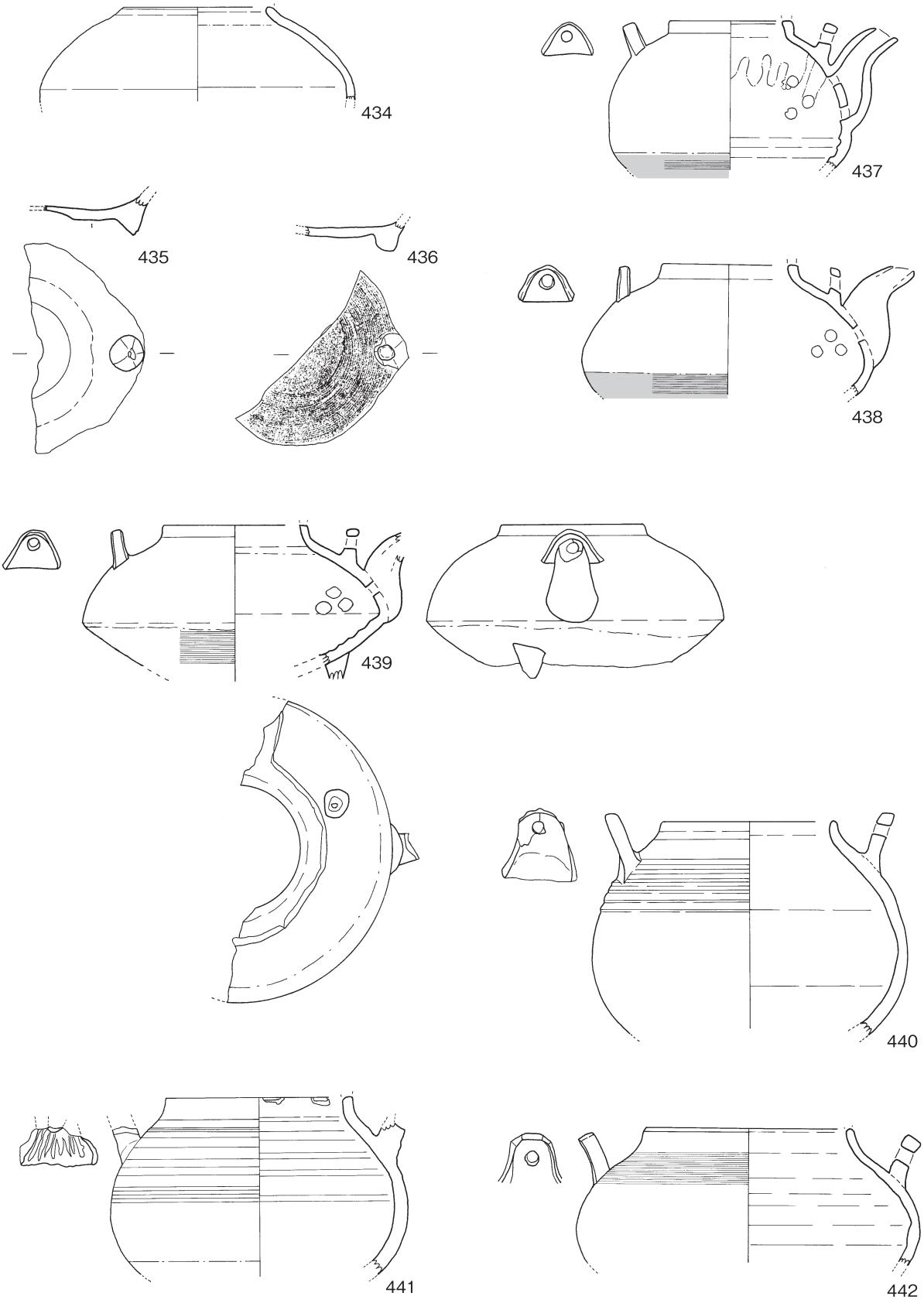
第 119 図 中世～近世の出土遺物 19 国内産陶器

水注（第 119 図）

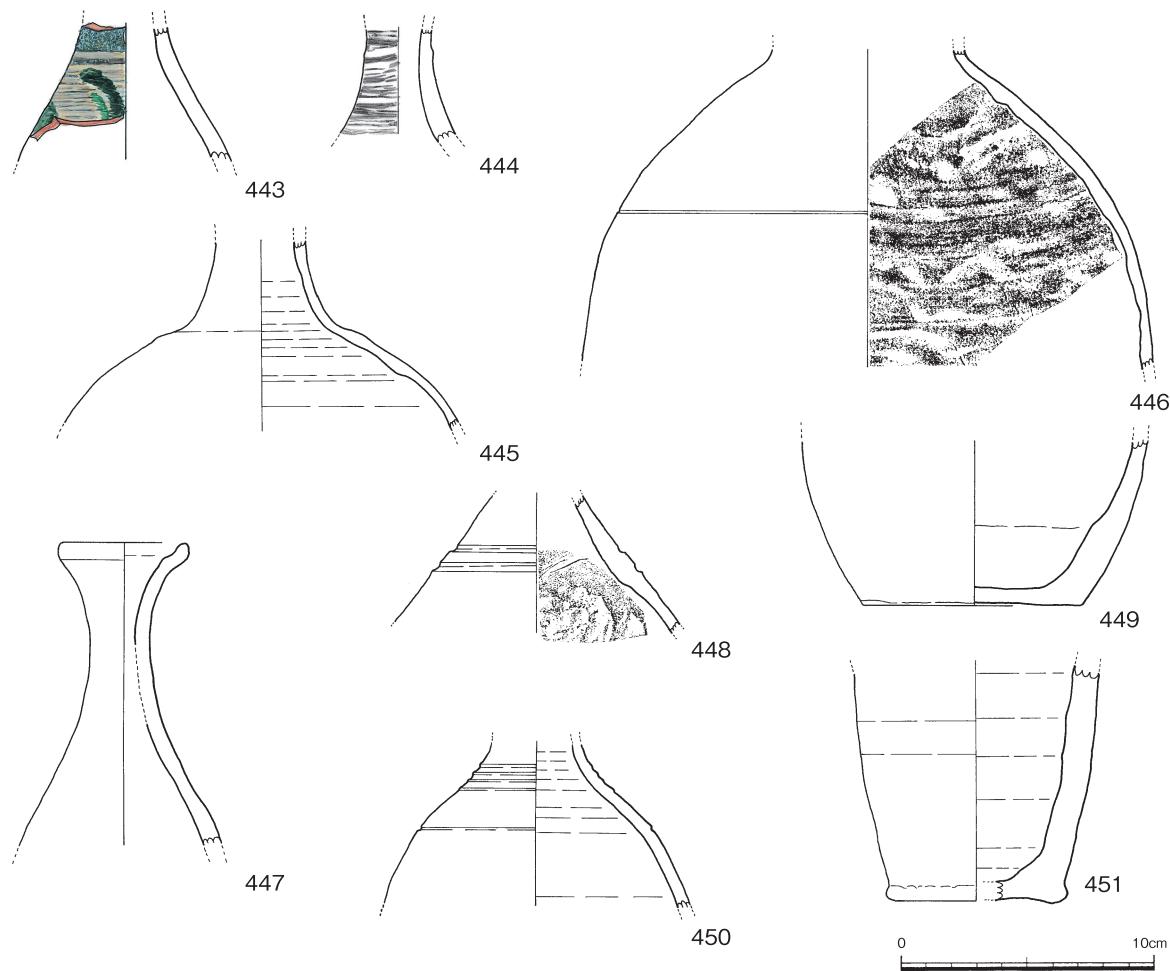
注口を有する形状のもので、火にかけないものを水注とした。

429 は、外面に黄緑色の釉がかかる瀬戸産の灰釉陶器である。中世前半（13世紀頃）のものと思われる。注口脇の肩部に櫛目状の文様が施される。

430～433 は薩摩焼である。430・431 は苗代川系のものである。430 は巻口の注口部である。注口に向かって右側を上に巻く。焼成不良のためか、胎土は鈍い橙色を呈し、灰釉も熔けきっていない。堂平窯産のものと思われる。431 は、水注の把手部である。432・433 は、龍門司系のものである。432 は焼酎の酒器で、「からから」と称されるものである。外面に飛び鉢が施される。433 は、小形の水注である。肩部は強く屈曲し、稜を有する。褐釉が外面腰部までかかる。詳細な用途は不明である。



第 120 図 中世～近世の出土遺物 20 国内産陶器



第 121 図 中世～近世の出土遺物 21 国内産陶器

土瓶（第 120 図）

すべて薩摩焼である。434・435 は堅野系のもので、内外面に褐釉がかかる。435 は脚部まで施釉される。436 は底部で、ヘラ状工具による筋状の痕跡が観察される。437 は丸形のものである。438・439 は平形のものである。438 は胴部に稜を有さず、丸みを帯びるものである。439 は胴部に稜を有し、ソロバン玉形を呈するものである。440～442 は外面肩部に筋状の細い沈線が施されるものである。器面調整としてではなく、文様を意識して施されたものと思われる。耳は型作りであるが、441 は装飾が施される。

徳利（第 121 図）

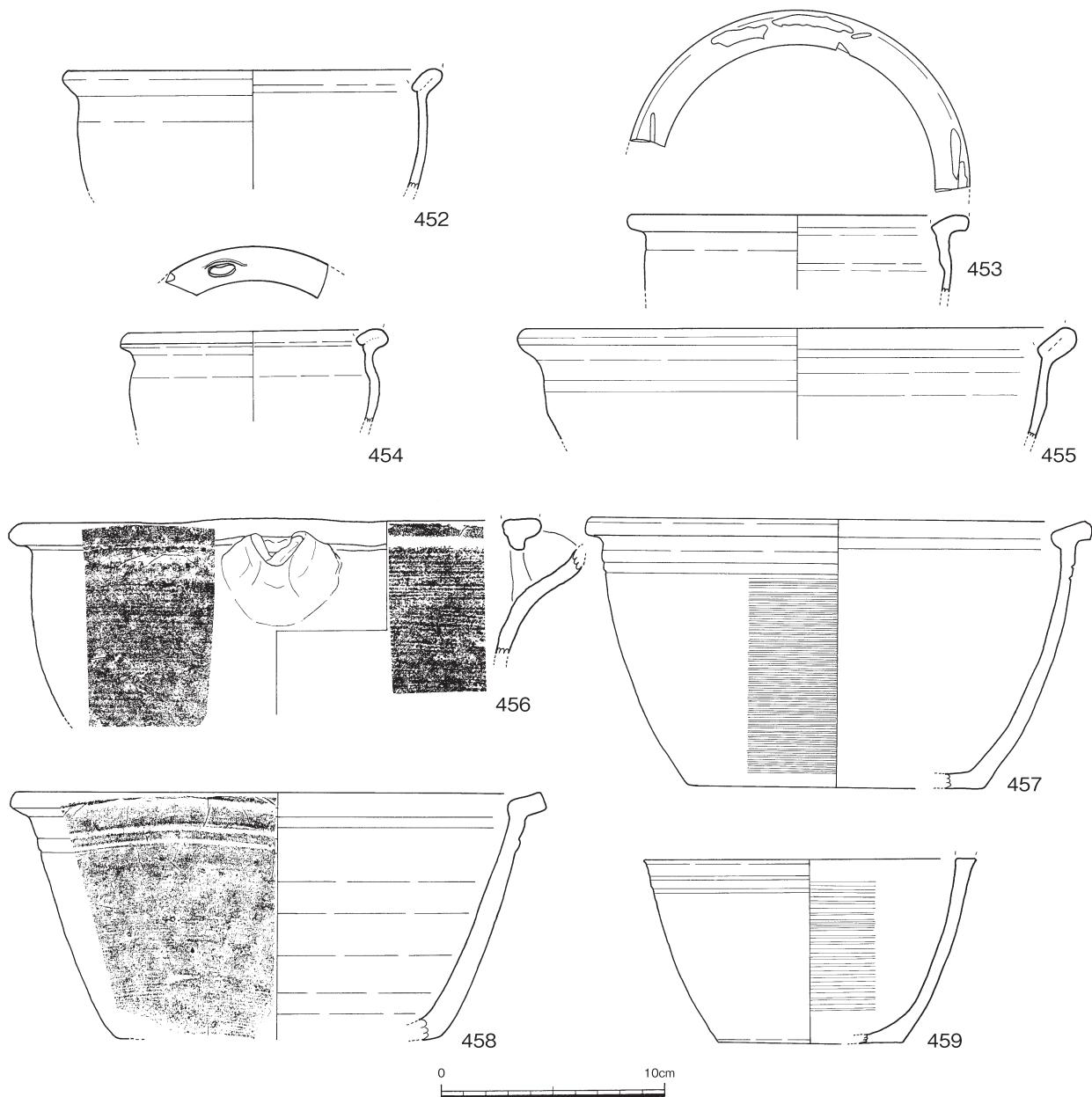
443・444 は肥前陶器である。どちらも外面に白土による刷毛目が施され、その上から、443 は緑釉で、444 は褐釉で文様が描かれる。445 は薩摩焼堅野系のものと思われる。胎土は鈍い灰褐色を呈し、外面に赤みを帯びた褐釉がかかる。446 は、内面にタタキ成形時のあて具痕が残るもので、外面肩部には 1 条の沈線が巡る。胎土は灰褐色を呈し、内外面に黄色みを帯びた灰釉がかかる。初期の薩摩焼古窯である串木野窯産の可能性も考えられる資料である。447～449 は薩摩焼苗代川系のものである。447 は鶴首形を呈する。堂平窯産と思われる。

448は肩部に2条の沈線が巡る。449は底部である。450・451は琉球産の荒焼である。450は頸部に4条、肩部に1条の沈線が巡る。451は「鬼の腕」と称される泡盛用の酒瓶である。

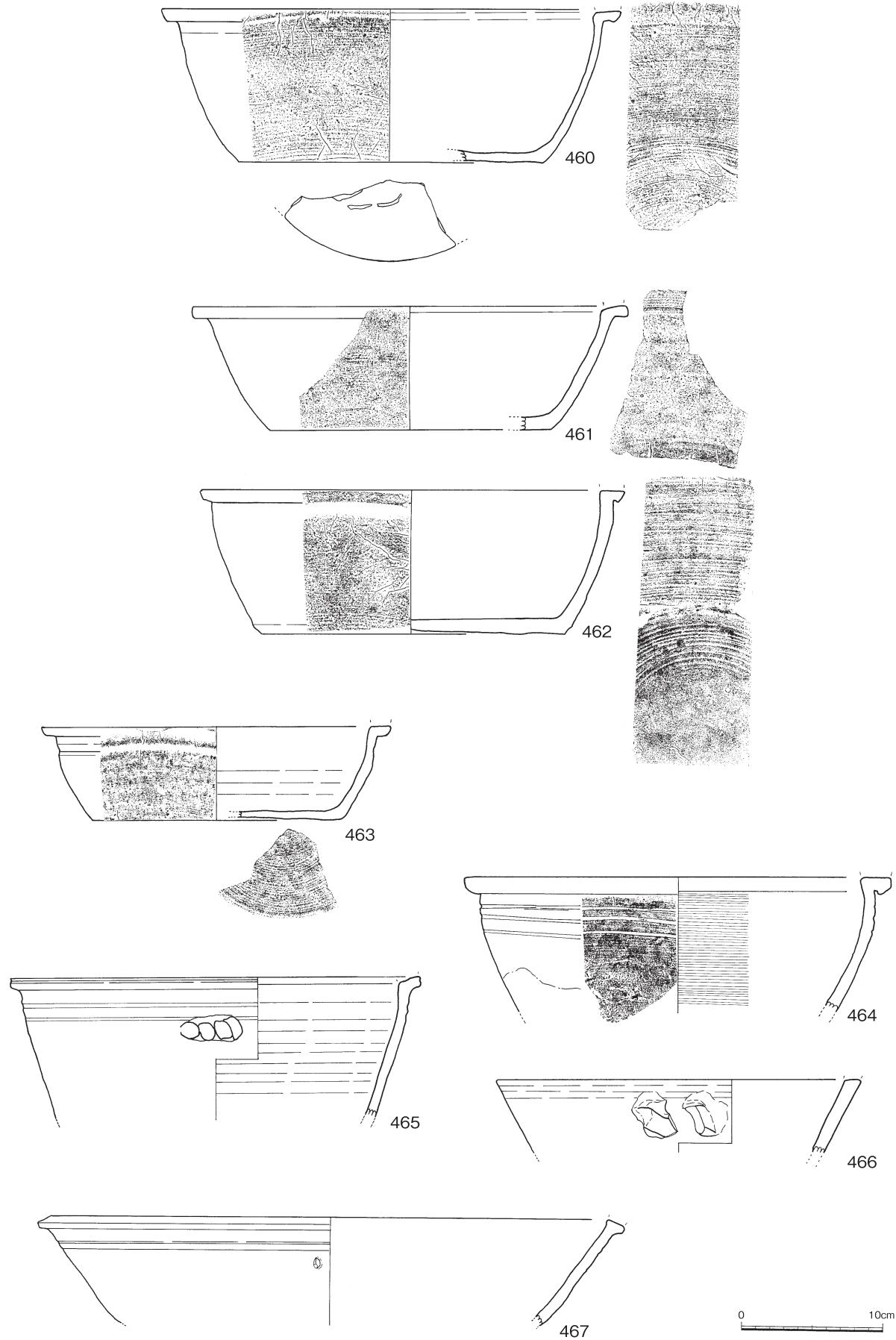
片口（第122図）

片口については、残存していないものもあるが、口縁部下位に1か所片口がつくと思われるものを片口として分類した。すべて薩摩焼苗代川系の資料である。

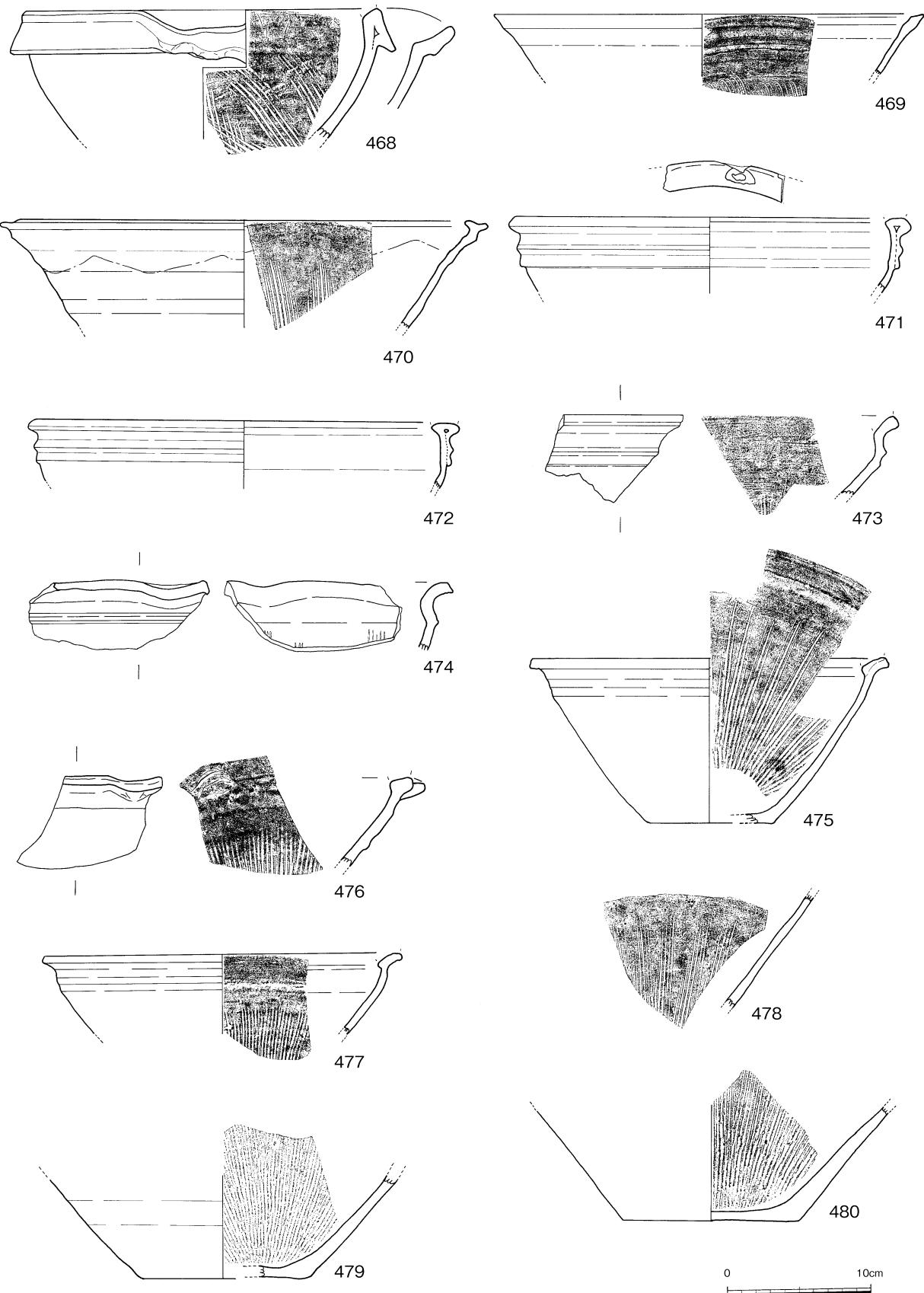
452～458の口縁部は、外側から内側に折り曲げて丸くつくられ、口唇部の釉は釉剥ぎされる。453・454の口唇部には貝目が残り、堂平窯産のものと思われる。456は片口部が残るものである。内外面に横筋状の調整痕が残る。457・458は外面に横方向の調整痕が残る。459は口唇部が平坦につくられるもので、口縁部外面には2条の沈線が巡る。器高が高いことから、片口に分類したが、このような口縁形態は浅鉢形の蓋にもみられることから、蓋の可能性も考えられる。



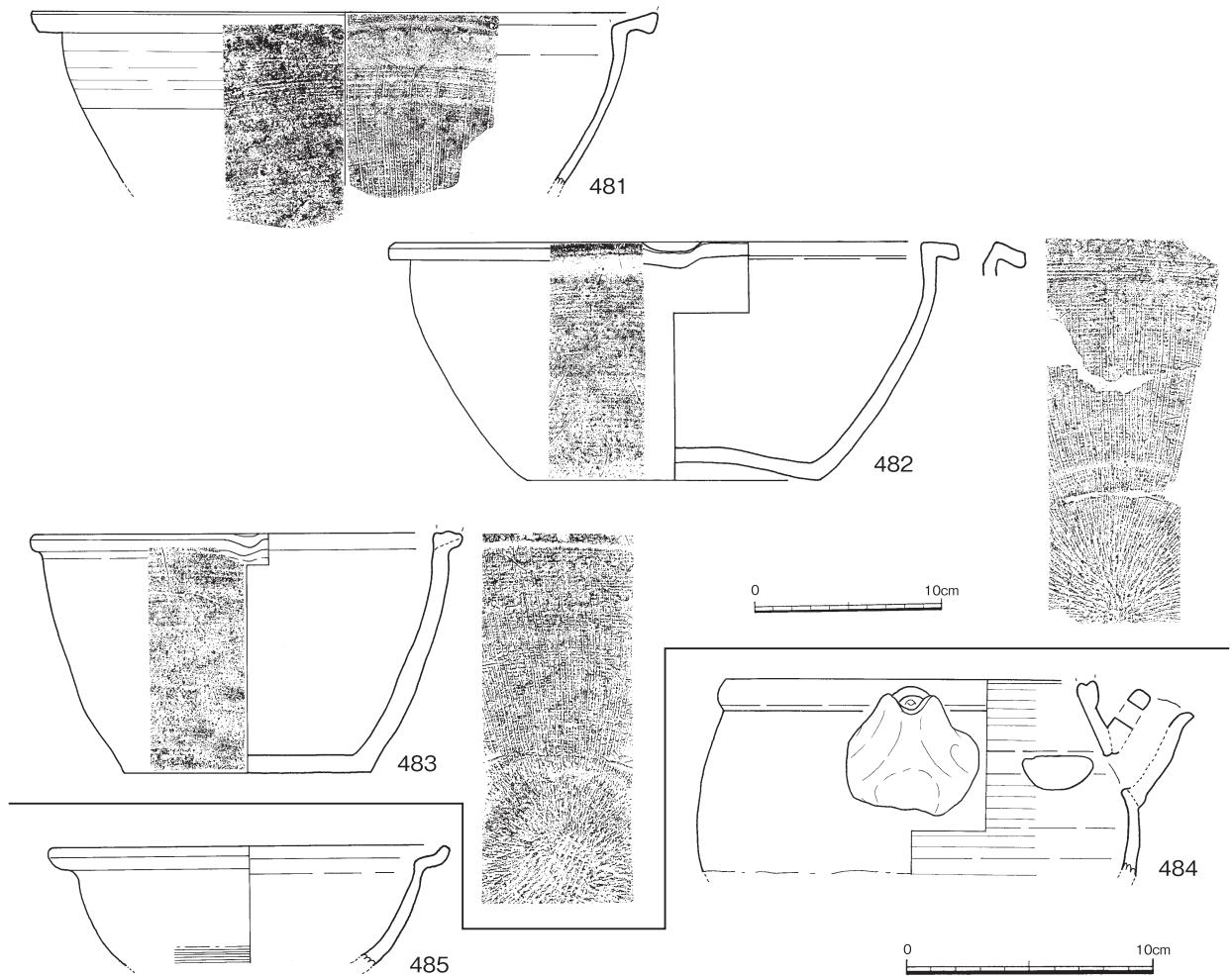
第122図 中世～近世の出土遺物22 国内産陶器



第 123 図 中世～近世の出土遺物 23 国内産陶器



第124図 中世～近世の出土遺物24 国内産陶器



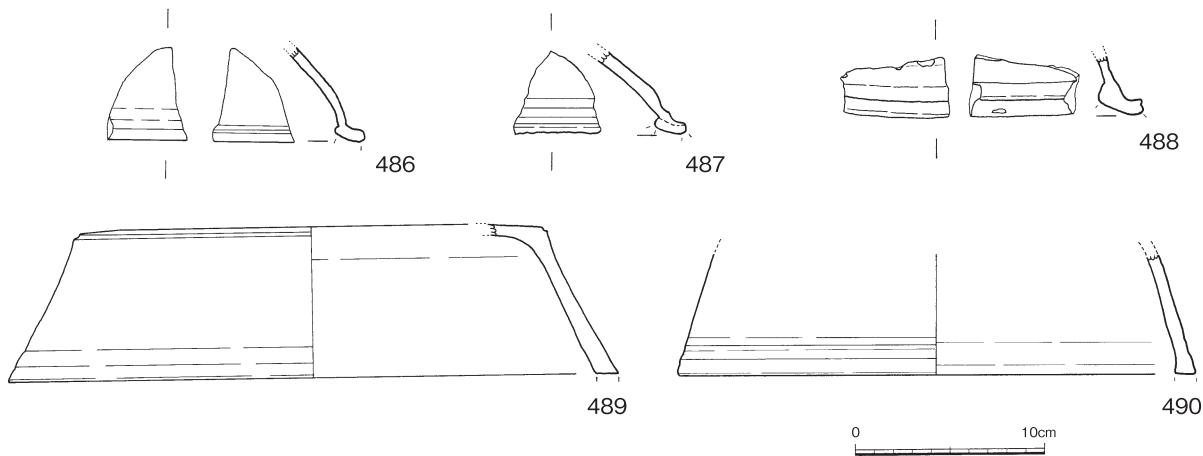
第 125 図 中世～近世の出土遺物 25 国内産陶器

鉢（第 123 図）

鉢はすべて薩摩焼で、苗代川系のものである。460～463は口縁部が「L」字状を呈するものである。内外面はヘラ状工具による器面調整のため、横筋が強く残る。口唇部の釉は釉剥ぎされ、外底面の釉は拭い取られる。鉢として分類したが、浅鉢形の蓋とも捉えることもでき、判断が難しい。464は口縁部が外側に折れ、断面が三角形状を呈するものである。外面口縁部下位には3条の沈線が巡る。465は口縁部が短く外側に折れるものである。外面に2条の弱い沈線が巡り、把手が形骸化したものと思われる突起が観察される。466・467は、鉢として分類したが、形状から浅鉢形の蓋の可能性も考えられる資料である。466は口唇部が平坦につくられる。口縁部外面には2条の弱い沈線が巡り、「ハ」の字形に把手もつけられる。467は口縁部が短外側へ屈曲するもので、外面には2条の弱い沈線が巡る。

擂鉢（第 124・125 図）

468は備前産のものである。口縁部は外側に折り返され、断面三角形を呈する。内面には斜位の擂り目が入る。469・470は肥前系陶器の擂鉢である。釉は口縁部にのみかけられる。



第 126 図 中世～近世の出土遺物 26 国内産陶器

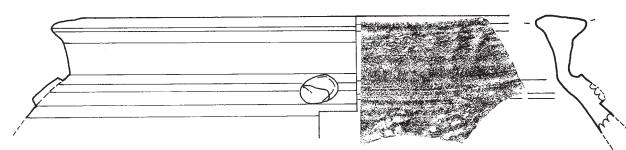
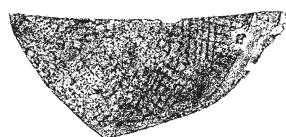
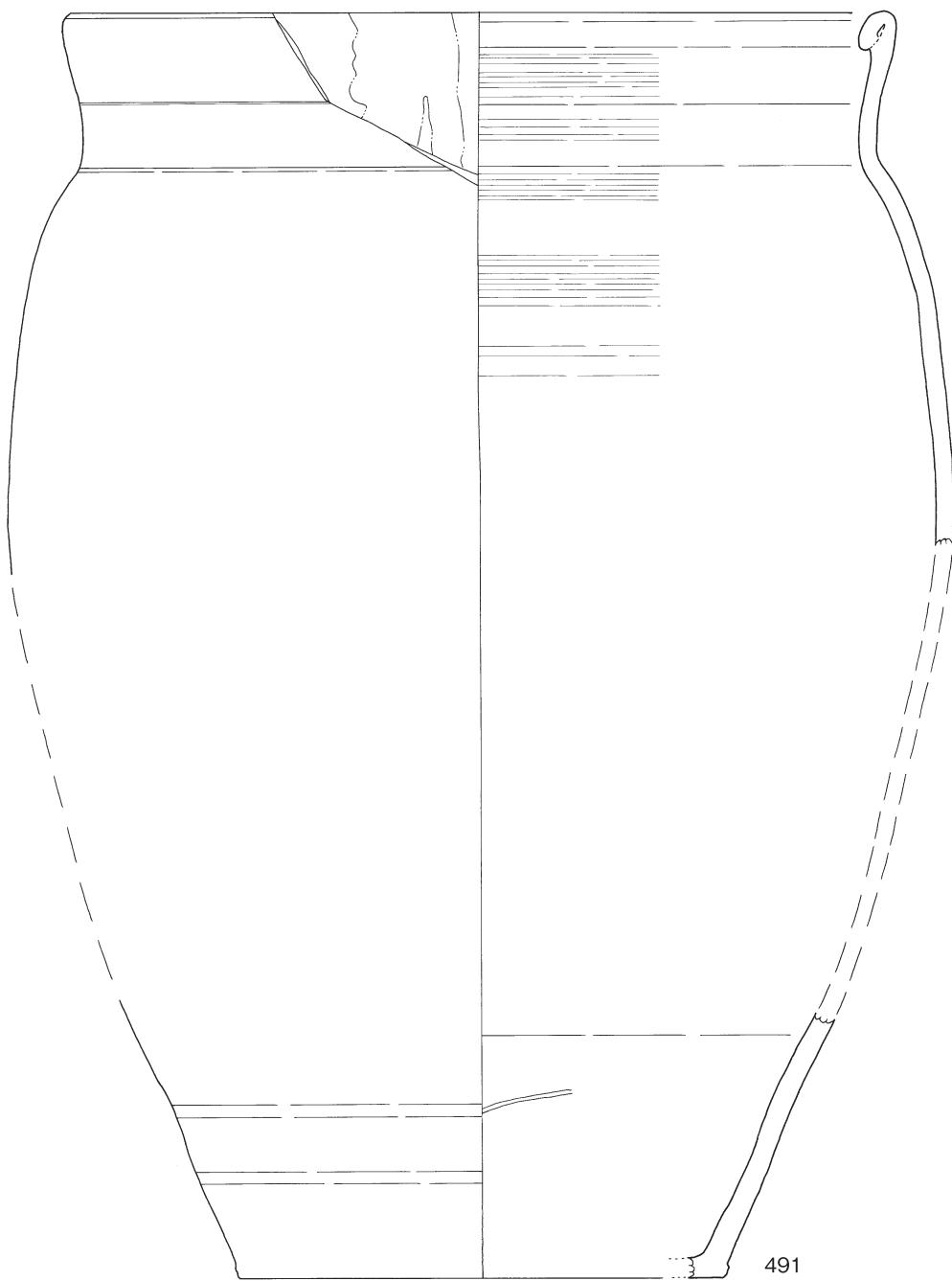
469 は口縁部を内側に折り返して、弱い稜を 2 段つくる。470 は口唇部を平坦気味につくり、「T」字状を呈するものである。471～483 は薩摩焼で苗代川系の資料である。471・472 は口縁部を外側に折り曲げて肥厚させ、外面口縁下位に 2 条の突帯を巡らせるものである。口唇部は平坦気味につくられる。釉剥ぎされた口唇部には、貝目も観察される。内面は口縁部下位に余白を残して擂り目が施されるため、擂り目が観察できない。どちらも堂平窯産と考えられる。473・474 は口縁端部が外側へのび、「S」字状を呈するものである。外面には低い 2 条の突帯が巡る。内面の擂り目は口縁下位に余白をあけて入る。475～477 は口縁部を外側から内側に折り返してつくるものである。外面には 2 条の突帯が形骸化したような弱い稜が観察される。内面には余白を残して擂り目が入る。478 は胴部、479・480 は底部である。3 点とも細くシャープな擂り目が密に入る。481～483 は口縁部が「L」字状を呈するものである。内面の擂り目は細くシャープだが、口縁下位に余白を残さず、上位まで入れられる。また、擂り目の下には横方向の器面調整の痕跡が筋状に入る。

鍋・釜（第 125 図）

484 は鍋である。薩摩焼苗代川系のものである。485 は釜である。苗代川系のもので、片口と耳がつく形状のものである。484・485 とも、外底面には煤が付着する。

蓋（第 126 図）

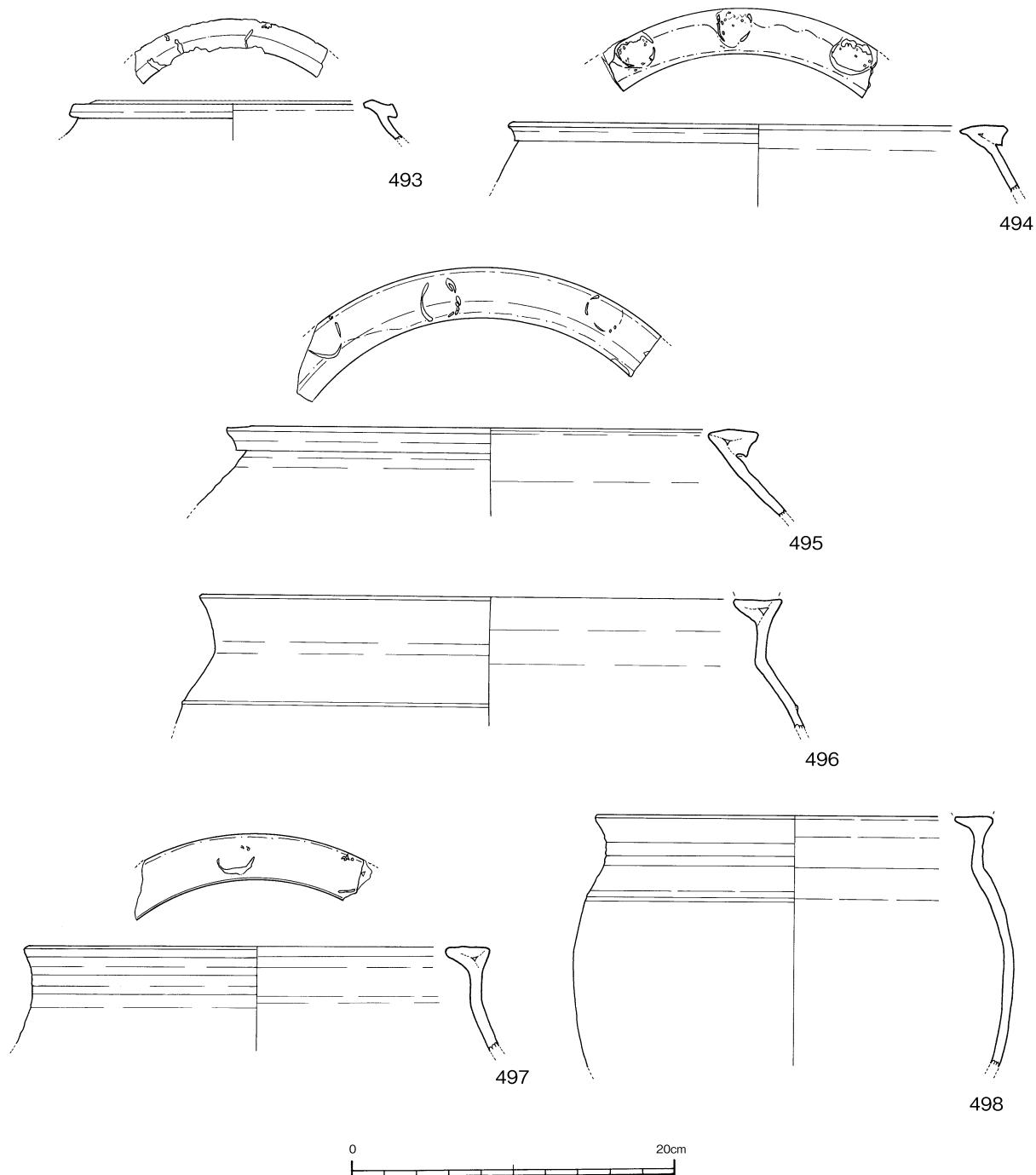
ここでは、甕等に被せる浅鉢形の蓋を報告する。すべて薩摩焼で、苗代川系のものである。486～488 は、口縁部を外側から内側に折り返してつくるものである。口唇部の釉は剥ぎ取られる。487 は口唇部に貝目が残る。489・490 は口唇部が平坦につくるものである。外面には 2 条の弱い沈線が巡る。489 の口唇部には貝目が残る。



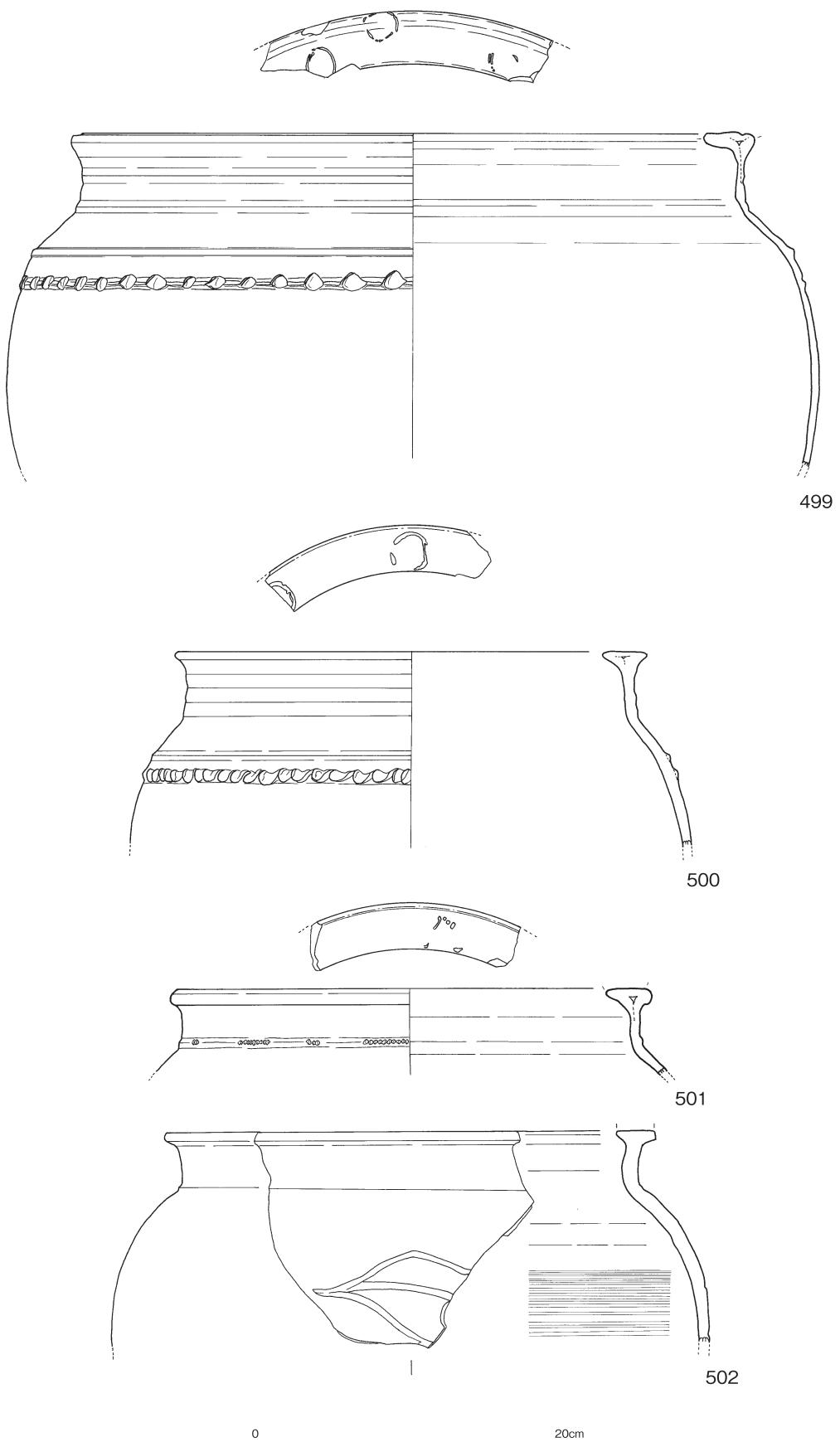
第 127 図 中世～近世の出土遺物 27 国内産陶器

甕（第 127 ~ 130 図）

491・492 は肥前陶器の大甕である。491 は、口縁部の内側は折り返され肥厚する。内外面には横ナデ調整が施されるが、下に格子目タタキの痕跡が観察できる部分もわずかに残る。釉は内外面ともに褐釉がかかり、白土による刷毛目も施される。492 は、口縁部が T 字状を呈するものである。内外面には格子目のタタキ目が残り、肩部にはボタン状の貼り付けが施される。493 ~ 508 は薩摩焼で、苗代川系のものである。493 ~ 495 は、口縁部を外側に折り返して逆 L 字状につくるもので、

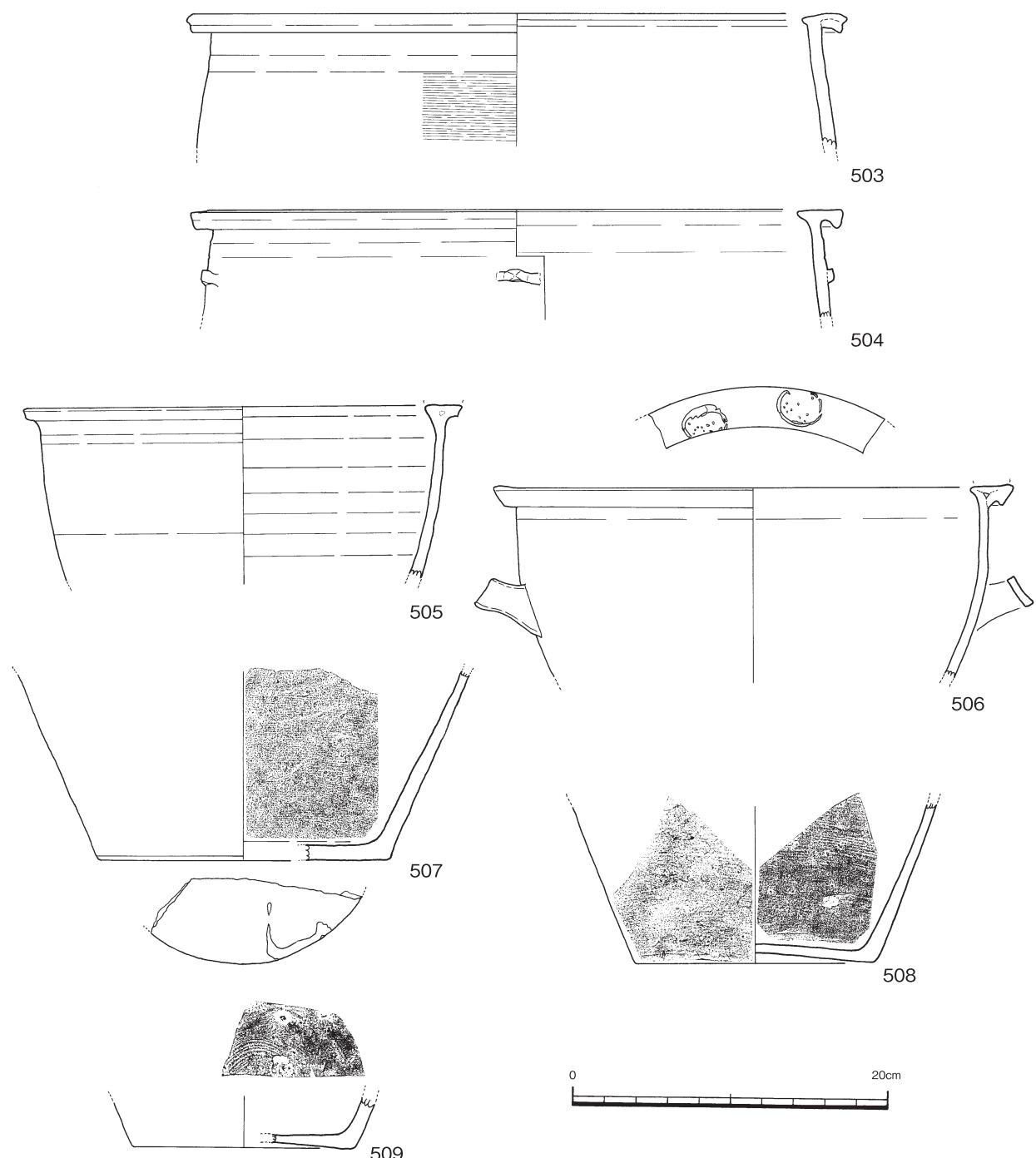


第 128 図 中世～近世の出土遺物 28 国内産陶器



第 129 図 中世～近世の出土遺物 29 国内産陶器

口唇部には貝目が残る。堂平窯の製品である可能性が考えられる。493 の口唇部は内側がやや高くなり、外側は溝縁状となる。495 の内面にはタタキ成型時のあて具痕がわずかに残る。496～502 は口縁部を内側に折り返して、T字状につくるものである。497・499～501 は口唇部に貝目が残る。499・500 は外面肩部に突帯と繩目突帯が巡る。501 は口縁端部が丸みを帯びる。頸部には突帯が巡り、細かい刻みが間隔をおいて入る。502 は、外面に搔き落とし文が施され、内面には横ナデの器面調整が残る。503～505 は、器形がバケツ状で、口縁部は L 字状を呈するものである。503 の外

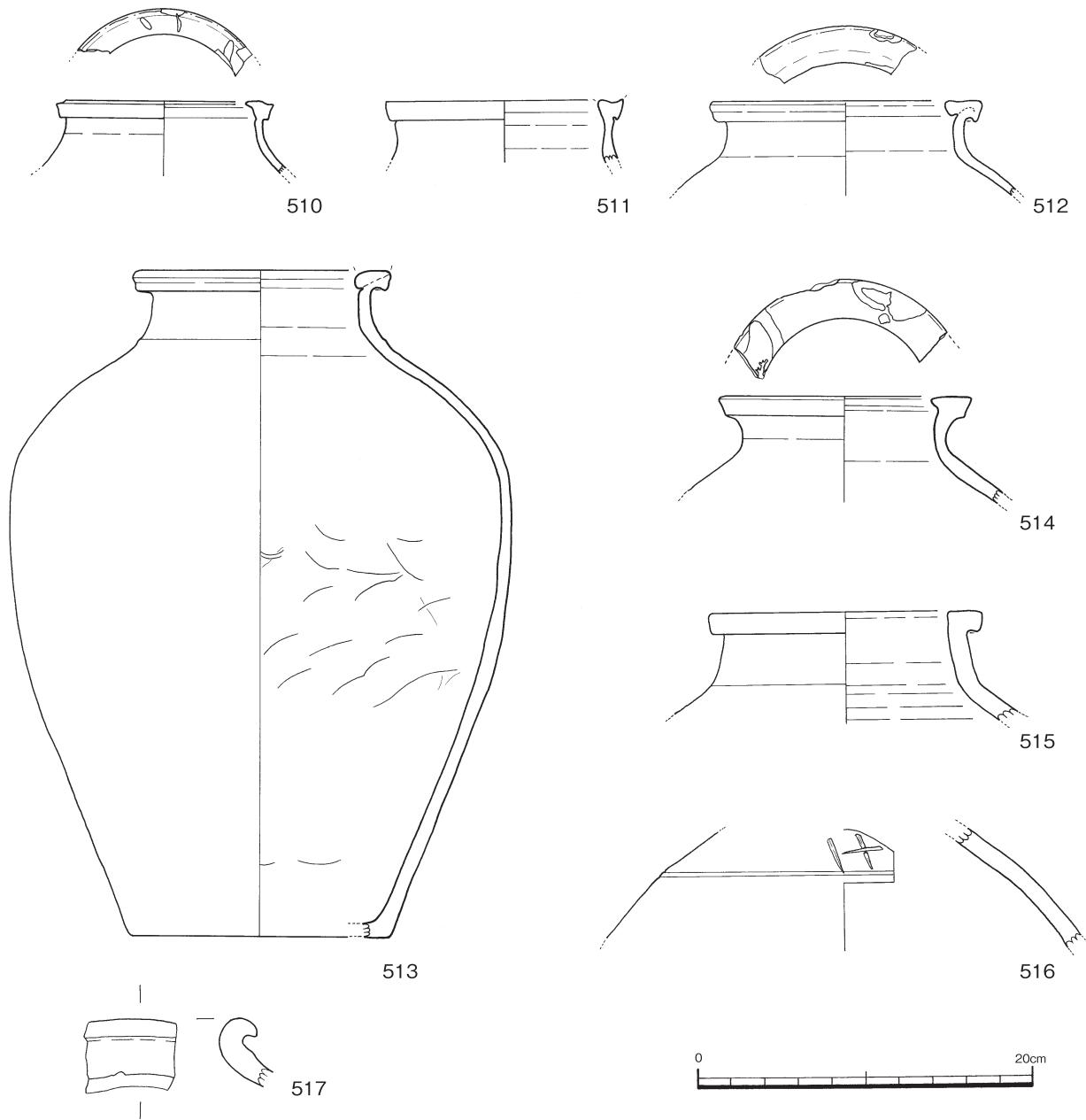


第 130 図 中世～近世の出土遺物 30 国内産陶器

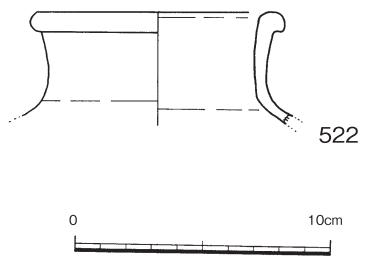
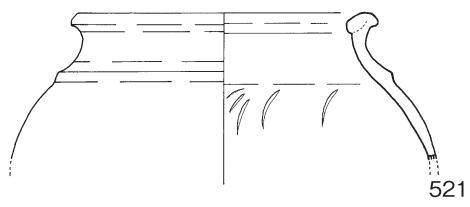
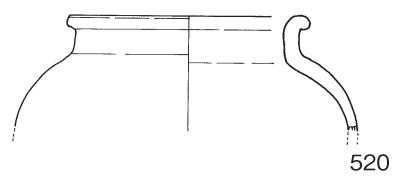
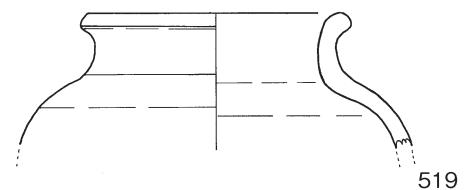
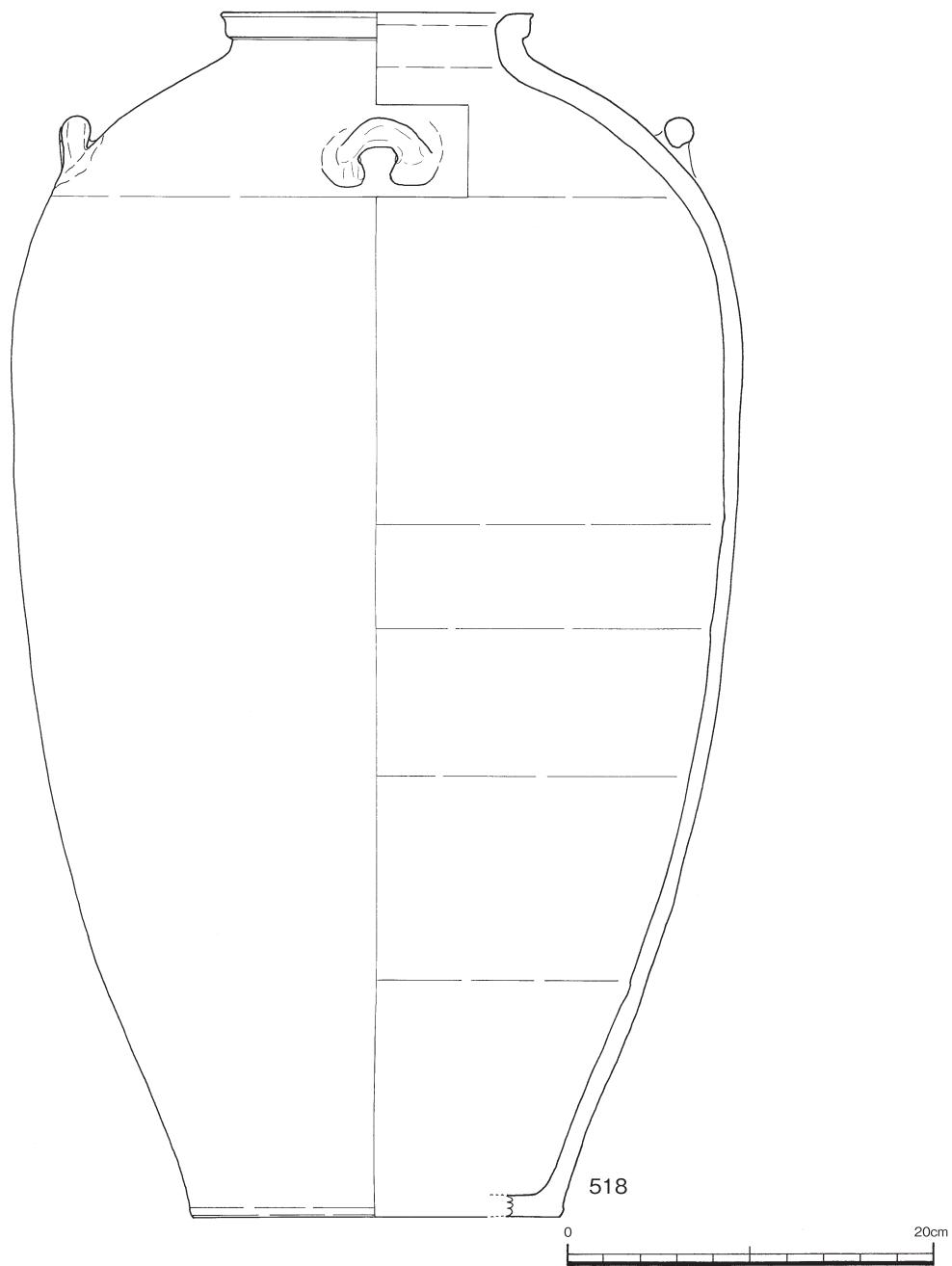
面には横ナデの器面調整が残る。504は口唇部に貝目が残り、外面には三角形状の突起が観察される。506は把手付甕である。507～509は底部である。507の外底面には貝目が残る。509は、胎土が灰褐色を呈し、黒色の鉱物が多く混じるものである。釉は赤みを帯びた褐釉が内外面にかかり、外底面は軽く拭い取られる。堅野系の資料と思われるが、詳細は不明である。

壺(第131・132図)

510～514・518は、薩摩焼苗代川系のものである。510・511は口縁部を外側に折り返すものである。口唇部は外側が溝縁状を呈し、貝目が残る。512～514は、口縁部を外側から内側に折り返してつくるもので、口唇部には貝目が残る。513は内面にタタキ成型時のあて具痕が観察される。



第131図 中世～近世の出土遺物31 国内産陶器



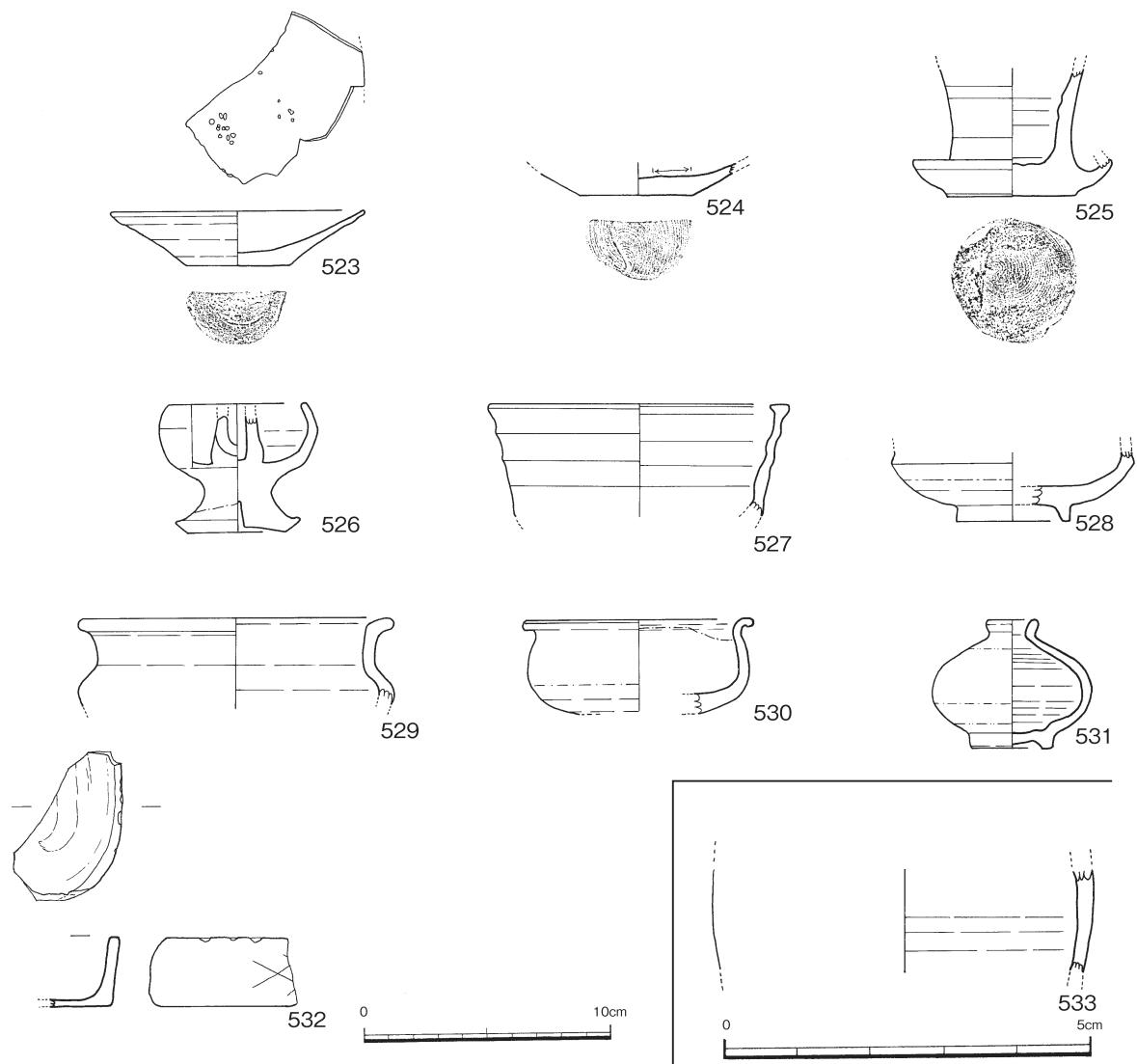
第132図 中世～近世の出土遺物32 国内産陶器

515・516は同一個体と思われる資料で、琉球産の荒焼である。胎土は赤褐色を呈し、516の外面にはヘラ書きによる「十一」と読める文字が入る。517は、備前焼である。口縁部は外側が丸く屈曲する。518は長胴の壺である。内外面には黒色に発色した鉄釉がかかり、肩部に横耳が4か所付く。

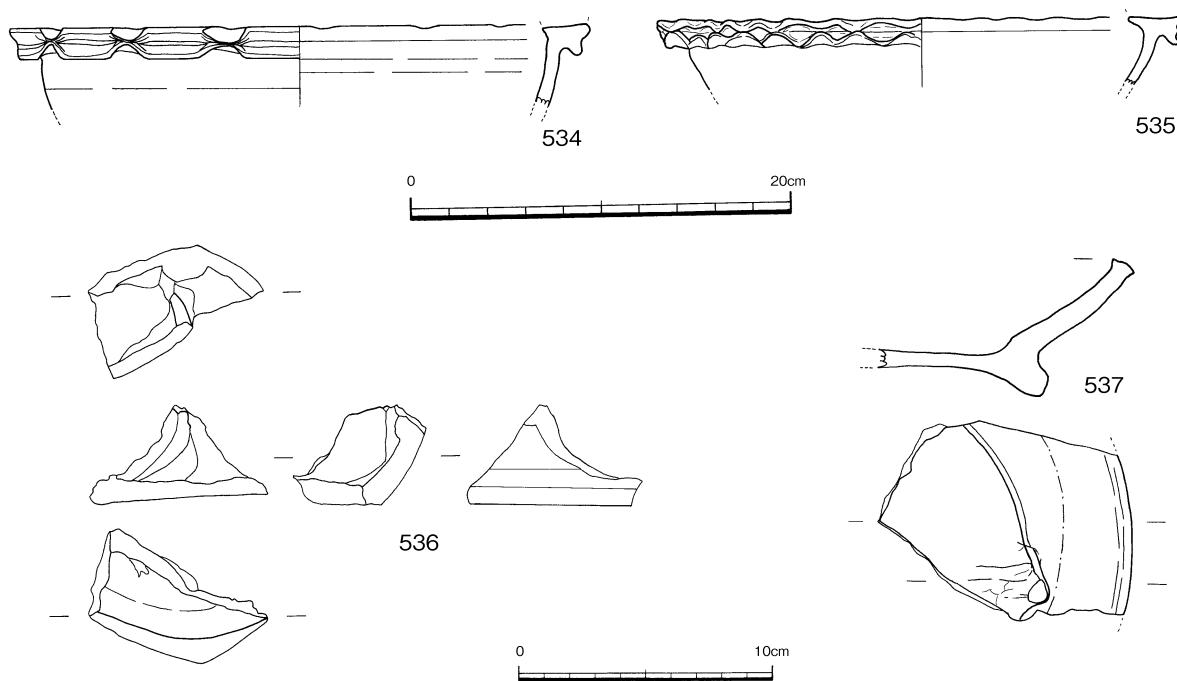
519～522は小壺である。4点とも薩摩焼苗代川系の資料で、519以外は堂平窯の製品と思われる。519は口縁部を外側に緩く外反させるものである。520・522は口縁部を外側に折り曲げて丸くつくるものである。521は口縁部を外側から内側に折り返すものである。

灯明具（第133図）

523～526は灯明具である。523・524は灯明皿である。いずれも外底面は糸切りである。523は、見込みにゴマ目が残る。524は、見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施される。525は灯明皿受け台である。外底面は糸切りされ、砂粒混じりの白土が薄く輪状に熔着する。526は、秉燭である。たんころ形のもので、外底面中央は円錐状に穿孔される。



第133図 中世～近世の出土遺物33 国内産陶器



第134図 中世～近世の出土遺物34 国内産陶器

仏具（第133図）

527～530は香炉である。527は口唇部と外面に銅緑釉がかかる。内面は無釉である。外面は稜線が強く残る。528は、内面無釉、外面腰部まで銅緑釉の資料である。529は、白色陶胎の白薩摩である。扁平鼎形を呈するものである。530は、口縁部が強く外反し、上面を平坦につくるもので、腰部は張り丸みを帯びる。

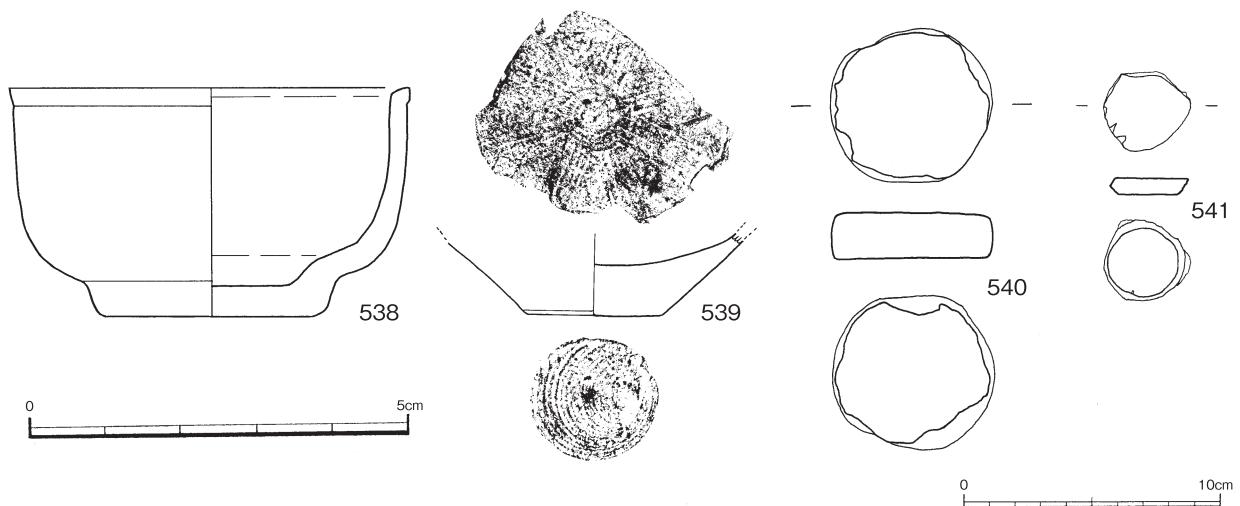
その他の陶器（第133～135図）

出土点数が少なく、1・2点の掲載となるものについては、その他の陶器として取り扱った。

531は油壺である。外面は白化粧土の上から透明釉がかかる。532は鬢盥である。白色陶胎のもので、側面には鉄釉がかり、焼成後先端が尖った鋭利なもので入れられたと考えられる印も観察される。

533は茶入れの胴部と思われる資料である。胎土は緻密で、外面には黒釉がかかる。内面は無釉であるが、水引きによる細かい轆轤線が残る。中国産もしくは薩摩焼堅野系の可能性が考えられる。

534・535は植木鉢と思われる資料である。底部が欠損しており、水抜き穴も確認できないが、口縁部の形状より植木鉢として分類した。534はL字状、535はT字状を呈する口縁端部をつまんで装飾を施すものである。536は箱庭用の仕切り盤と思われる。焼き締めで、琉球産の可能性も考えられるが、小片のため产地・用途等詳細は不明である。537は、浅鉢状の形状を呈するもので、外地面には獅子頭が3足つくと思われる。用途は不明である。



第 135 図 中世～近世の出土遺物 35 国内産陶器

538・539 は玩具である。お飯事道具と思われる。538 は土師質のものである。碗もしくは鉢と思われる。539 は擂鉢である。

540・541 はメンコである。540 は陶器を、541 は瓦を転用したものである。



第 136 図 中世～近世の出土遺物 36 その他

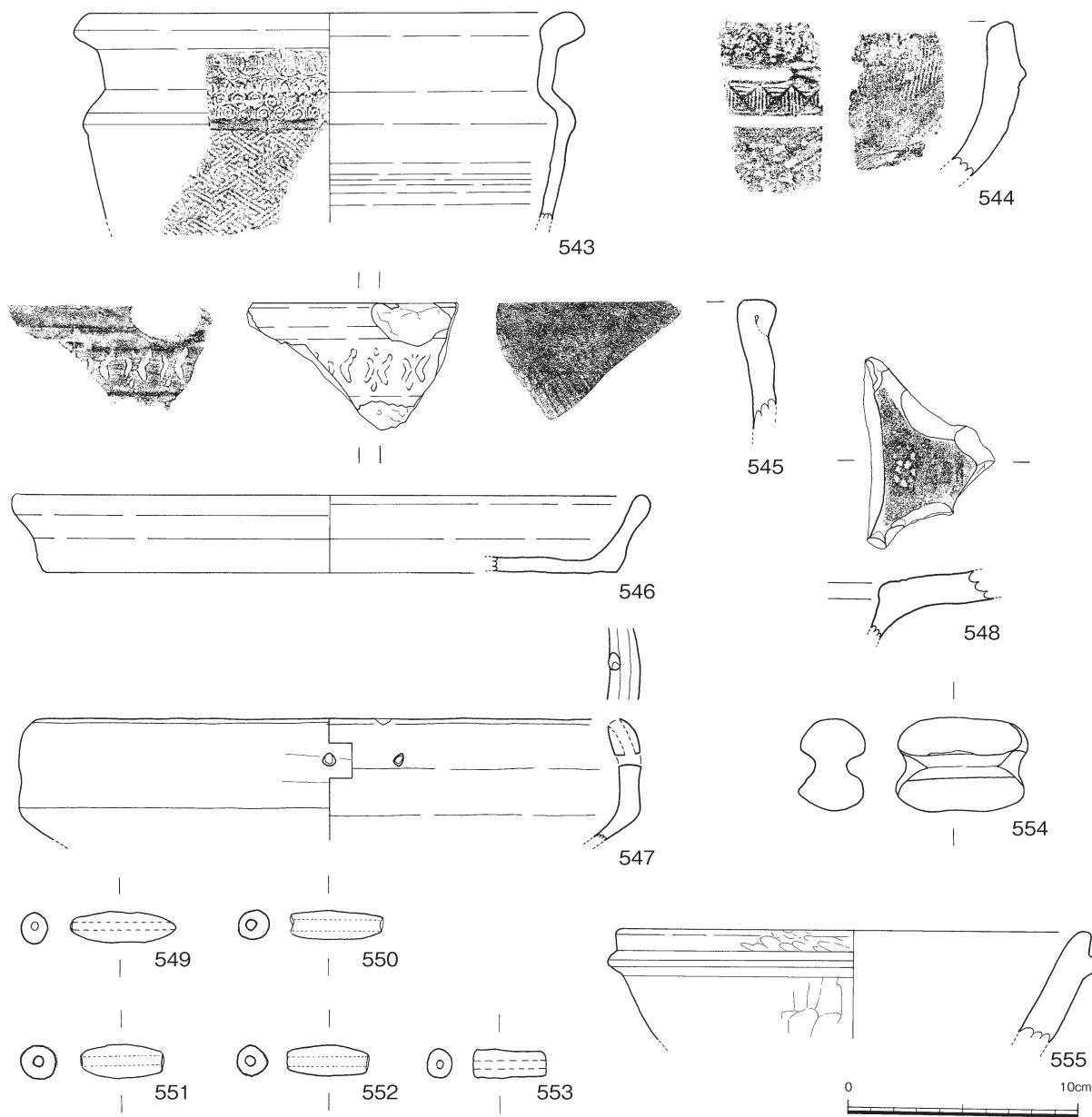
その他（第 136・137 図）

輸入陶磁器、国内産陶器、国内産磁器に大別できないものを、その他として分類した。土製品、瓦質土器、土師質土器、滑石製品がこれに相当する。

542 は人形型土製品である。頭部は欠損している。振り袖を着た女性である。型作りでつくられており、内面には型に粘土を押しつけた際の指跡が残る。

543 は、瓦質土器の火鉢である。胎土に金雲母が含まれる火鉢である。外面には、型押しの文様が施される。544・545 は中世後期の火鉢である。544 は浅鉢形のもので、外面に雷文がスタンプされる。545 は深鉢形のもので、外面に X 形の文様がスタンプされる。

546～548 は、土師質土器の焙烙である。焙烙については、中世の時代のものとの区別が難しく、層位的に捉えることもできなかった。ここでは焙烙をまとめて報告しておく。546 は体部が直線的



第 137 図 中世～近世の出土遺物 37 その他

に立ち上がる形状のものである。547は、補修穴と思われる穴が穿たれる。548は焙烙の把手部である。

549～554は土製品で、土錘である。土錘についても、中世のものと近世のものの判別が難しく層位的にも捉えることができなかつたため、まとめて報告することとする。549～553は管状土錘である。554は断面がH状を呈する土錘である。555は滑石製石鍋である。中世前期のものと思われる。外面口縁下位に短い鍔が巡る。

瓦（第138図）

556・557は軒丸瓦である。556の正面は巴文があり、裏面が一部剥がれ、接着しやすいように刻みをつけた接合面が観察できる。557の正面は珠文縁の巴文がある。558は唐草文の軒平瓦である。559は玉縁付きの丸瓦である。外面は丁寧に撫でられており、胎土には雲母が多く混じる。内面は、粗い布目と縄目が見られる。



第138図 中世～近世の出土遺物38 その他

金属製品（第 139 図）

金属製品は遺跡全体から出土しているが、特に 1 地点・2 地点の I a 層から多く出土している。出土遺物は、煙管の吸口や雁首、刀の鐔、古銭などである。

560 は煙管の雁首である。脂返しの湾曲が小さくなっていることから 1750～1800 年代のものであると思われる。掲載しなかったが、他にも雁首が 2 点出土しており、それらは火皿と脂返しの湾曲がほとんどないことから、1800 年代のものであると考えられる。561・562 は煙管の吸口である。

563 は簪である。頭部に耳かきが付き、髪に挿す部分が二股になっているものである。

564 は刀の鐔、566 は鉢である。^{はばき}E - 11 区で出土した。刀の鐔に切羽下 2 枚および鉢が紐で結びつけられたような状態で出土した。刀身から離れた状態で、保管してあったものであると思われる。鐔の形は撫丸形、耳は丸耳である。両面には折れ松葉文様が施されている。565 は刀の鞘の先端に^{こじり}つける鐔である。^{こじり}E - 10 区で出土した。鉢の隣の区で出土しているので、おそらく同じ刀の一部であったのではないかと思われる。

古銭（第 139 図）

古銭は計 26 枚出土しており、表採あるいは I a 層出土である。その内訳を見てみると、世高通寶 1 枚、洪武通寶 4 枚、寛永通寶 15 枚、明治錢貨 2 枚、不明 4 枚である。そのうち、8 点を図化した。

567 は世高通寶である。4 地点にて表採された。世高通寶は琉球銭で、琉球王朝の尚徳（世高王：在位 1461～1469 年）が永楽通寶を土台として鋳出したものである。568 は洪武通寶である。G - 24 区 I a 層で出土した。明銭である。無背で径は 2.3cm の小平である。569～572 は、「寛」字の 12 画と 13 画の頭が相接し、「寶」字の貝画末尾が「ス」の古寛永通寶である。1636～1659 年に鋳造されていた。573・574 は、「寛」字の 12 画と 13 画の頭が離れ、「寶」字の貝画末尾が「ハ」の新寛永通寶である。573 は 3 枚が重なっているが、一番下の背面には「元」字がある。

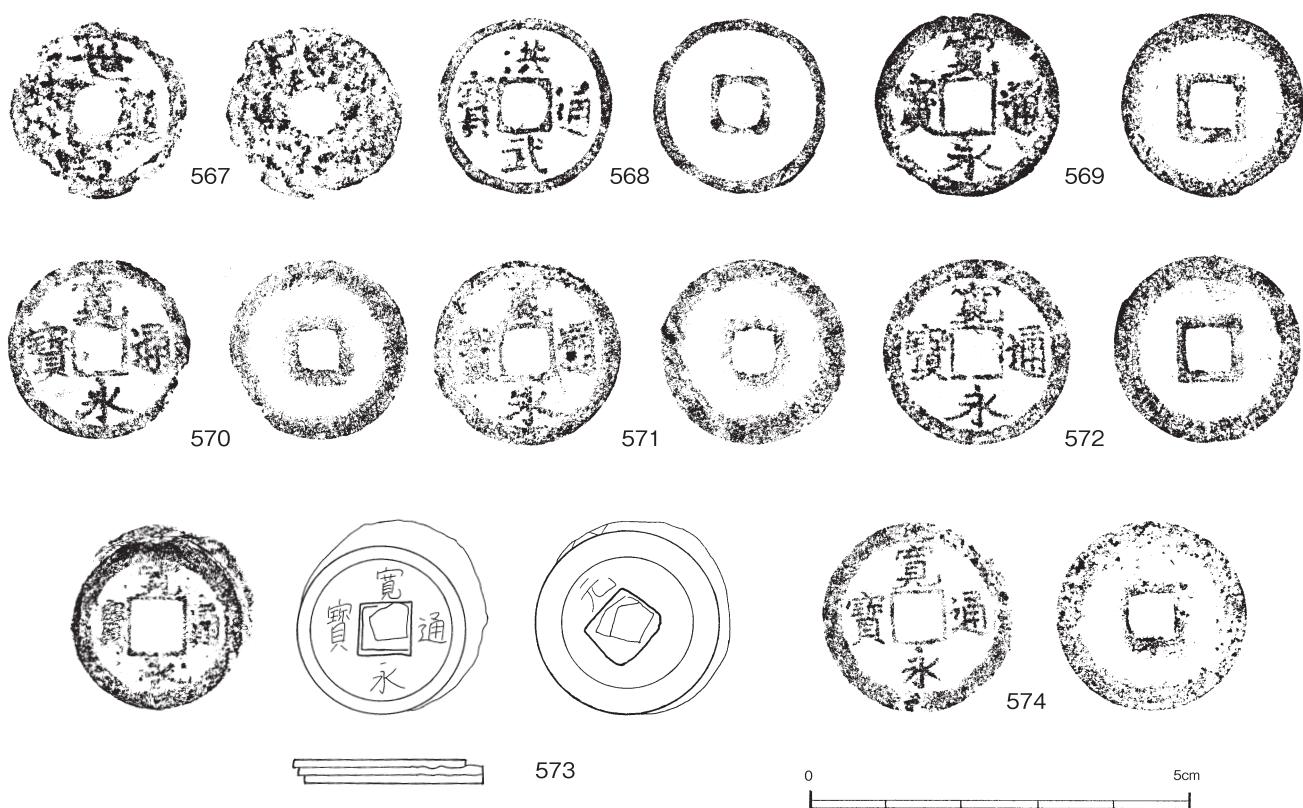
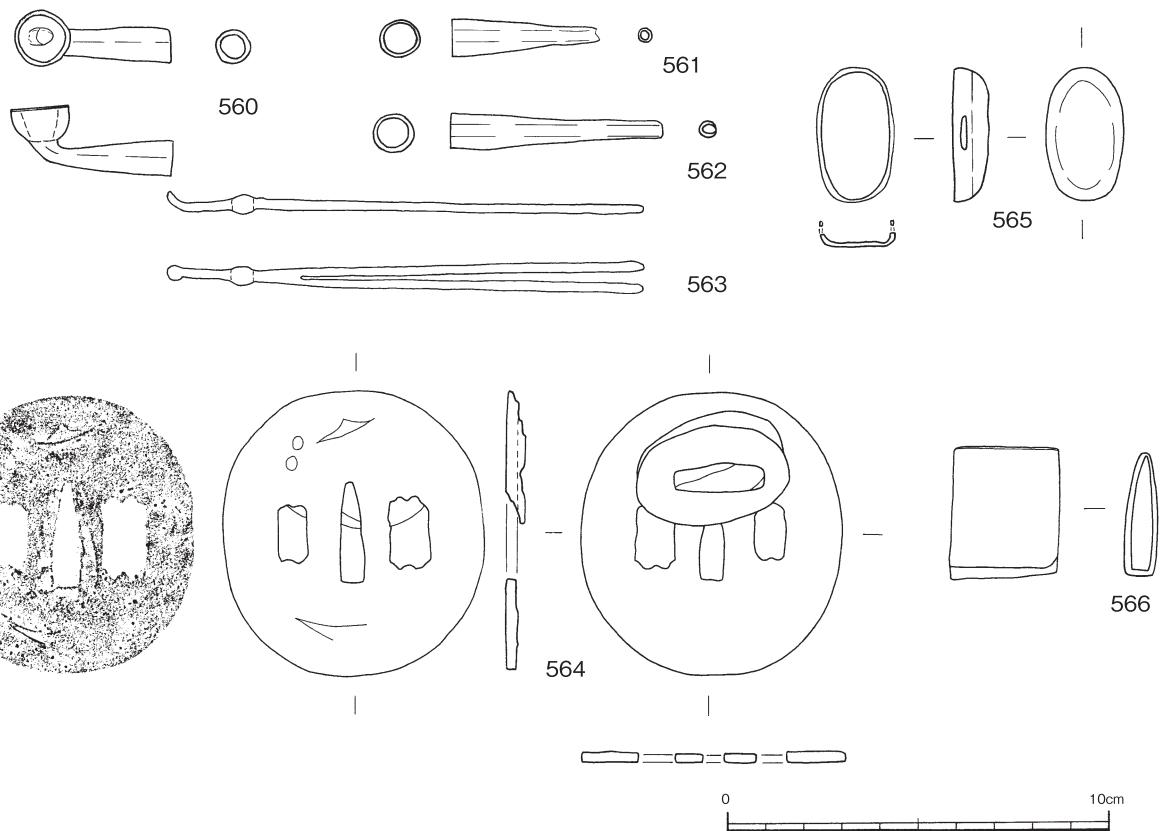
埴堀・轍の羽口・鉄滓（第 140 図）

575 は、埴堀である。576・577 は、轍の羽口である。筒状のものと思われるが欠損しており、一部が残っている。578～582 は鉄滓と思われる資料である。578・579 は碗形滓、流動滓等、形状が明確に判別できるものはない。580～582 は碗型鉄滓の一部と思われる。

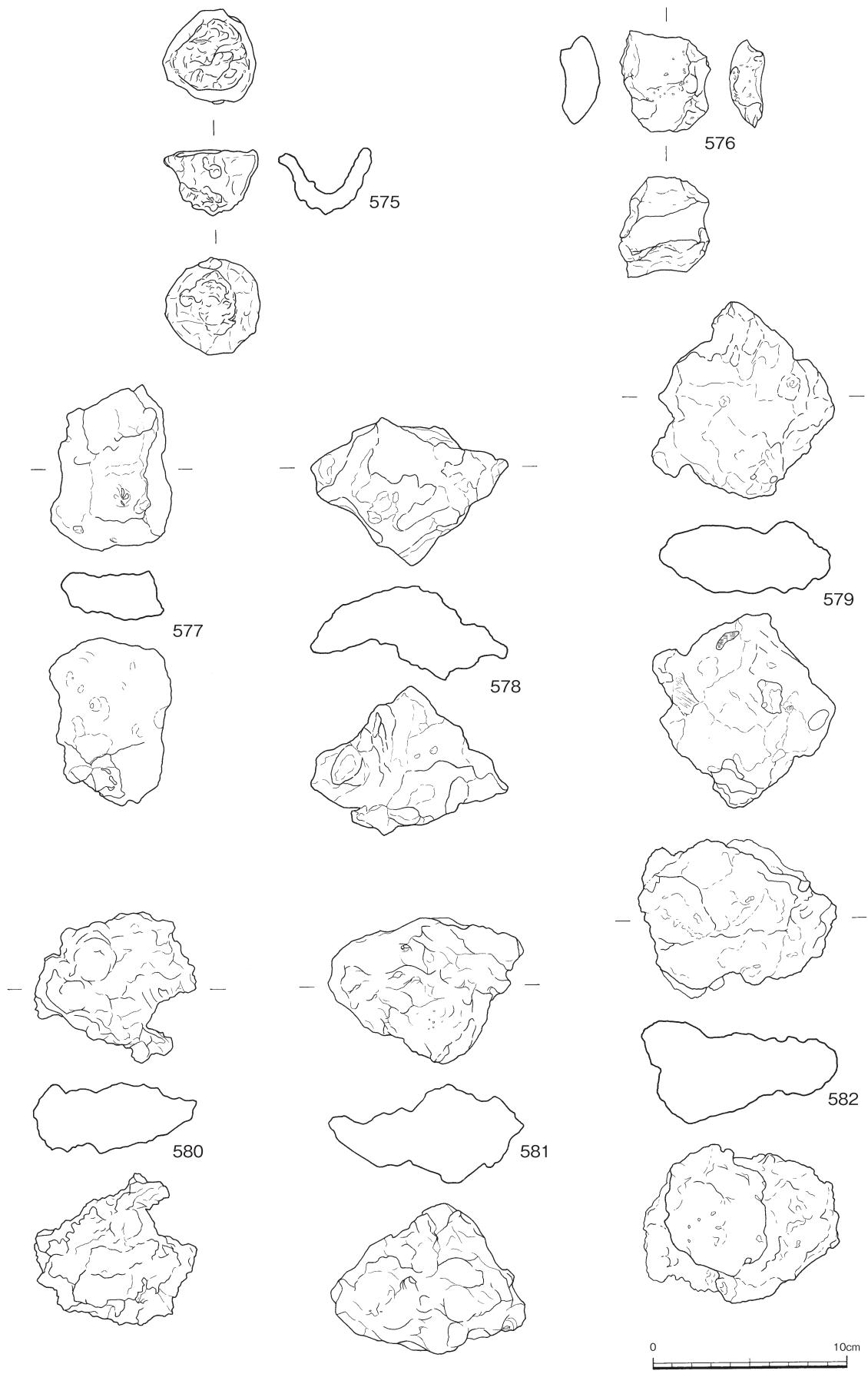
近世～近代以降の出土遺物

近世～近代以降の出土遺物については、江戸時代から明治・大正時代に至るまでの資料的価値が高いと考えられるものについて掲載した。本遺跡では、磁器の碗・皿・蓋・段重・仏飯器・小壺・急須、土師質土器、鉄滓を掲載した。

583 は鋳ついた鉄製品と思われるものに碗蓋が熔着した資料である。碗蓋の文様は銅板転写により描かれる。584 は徳利である。口縁部は玉縁状を呈し、外面には草化文が描かれる。585～587 外面には銅板転写により文様が描かれた碗である。588 は体部がやや丸みを帯びる小碗で、外面には馬の文様が描かれる。「子ども茶碗」の可能性が考えられる。589 は色絵の碗である。590・591 は色絵の皿である。



第 139 図 中世～近世の出土遺物 39 その他



第 140 図 近世～近代以降の出土遺物 1 鉄滓ほか

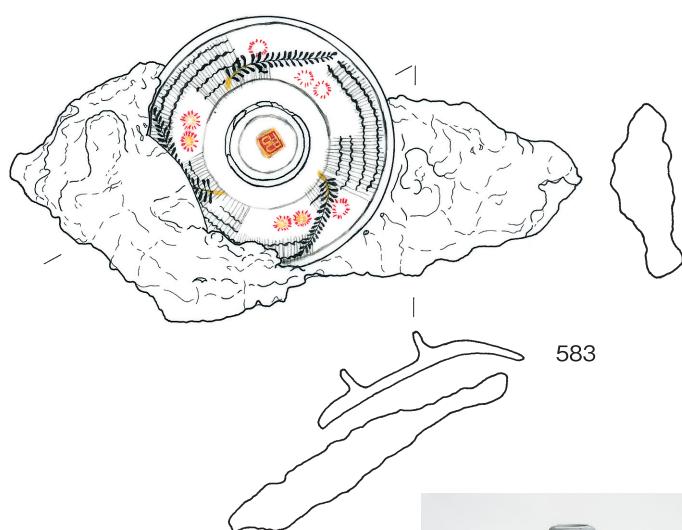
大正時代の瀬戸・美濃産である。592は外面に銅板転写により文様が描かれた段重である。593・594は仏飯器である。外目には栗色の厚めの釉がかかる。

595は南九州で一般的に「からから」と称される焼酎を入れるための容器である。肩部が強く屈曲する。在地産と思われる。

596は磁製の醤油入である。右手で持つて使用する際に、コバルトでかかれた「醤油入」の文字が正面にくるようにつくられている。在地産と思われる。

597・598は小壺である。597は内面口縁部上位に、「鹿児島県尋常中学校第一分校 明治三十年」、見込みに「落成・開校式」の文字がみられる。598は日露戦争からの凱旋を祝うもので、明治38(1905)年頃のものである。597・598は高台内底面に同じ旗印が描かれており、同一の生産地であると考えられる。

599は急須である。外面には銅板転写により文様が描かれる。在地産と思われる。



583



584

第141図 近世～近代以降の出土遺物2 磁器